

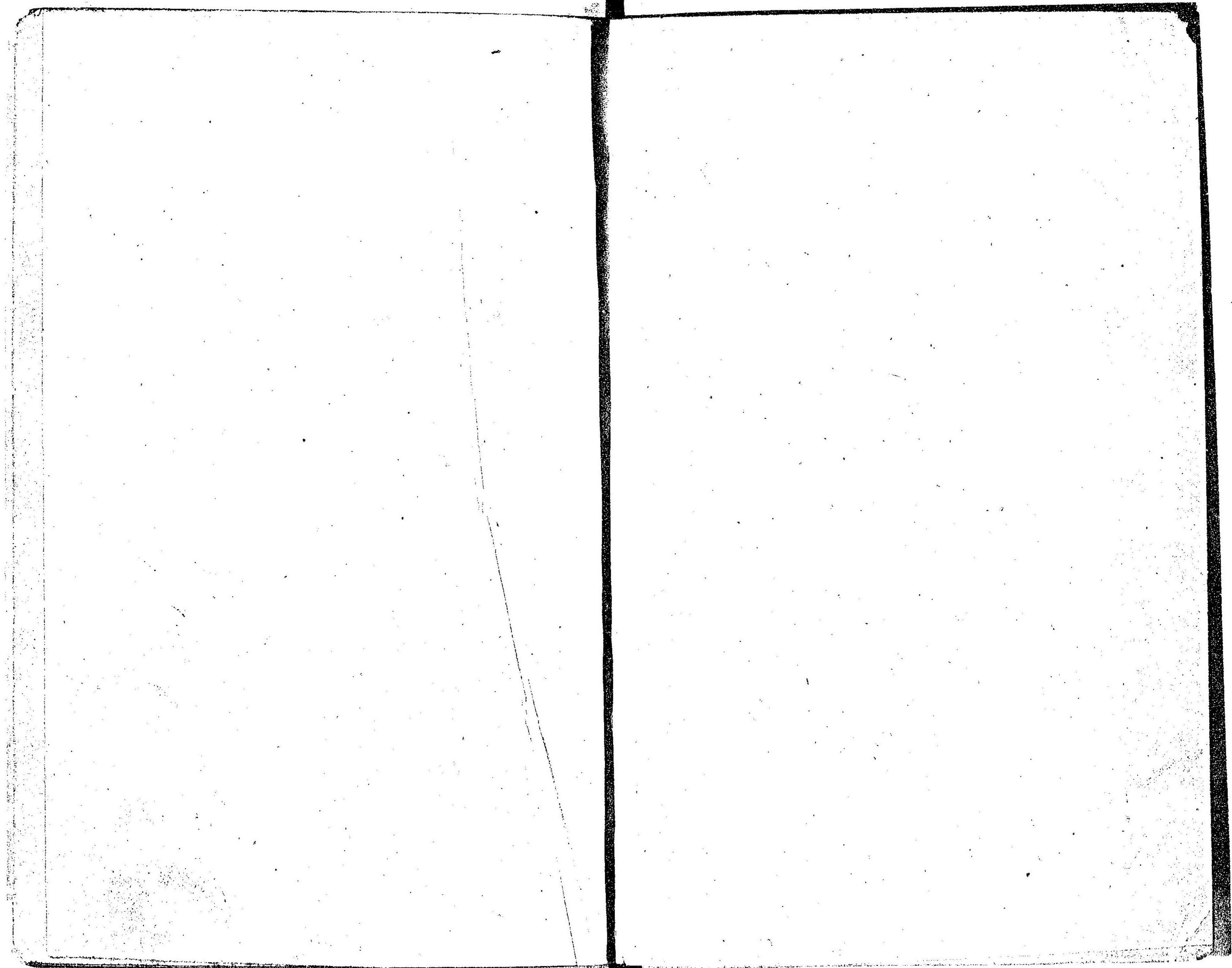
88  
166

蘇國大學教授ジョンプラッキー原著

日本田中一貞翻譯

# 修養論

東京民友社發行



88-166.

1

Edinburgh

30 Walker St

August - 1899

My dear Sir

My Husband died

4 1/2 years ago, but

your letter has

reached me.

I cannot tell you

how grateful I am

for your attempt to

scatter the good

seed of that small

book Self Culture.



find its way.  
 A wonderful success  
 has attended the  
 small book - for I  
 hear from India, &c  
 that it is a text  
 book in Schools &  
 Colleges <sup>there</sup> and if  
 my dear husband  
 had lived, he wd.  
 have rejoiced to  
 know that what  
 was written for  
 his Scotch Students

among your inter-  
 esting people.  
 If I may judge  
 your ability to make  
 your translation  
 accurate from the  
 style of your English  
 letter, which is a  
 specimen of the  
 best English, I feel  
 much gratitude that  
 any one undertaking  
 the task is sure  
 to make the work

has reached the  
Hearts of almost  
every nation  
This is a lovely  
response to the  
loving effort to  
unite the universal  
heart as with one  
Beat. Thanking  
you for your good  
deed

Believe me  
Truly yours  
Elizabeth Stuart  
Blackie

ブラツキー夫人書翰(譯文)

拜復陳者愚夫事は既に四年以前に身まかり申候尤も  
御手紙は妾が手許に相達候扱て貴下には彼小冊子の  
種子を貴國の人々の間に御蒔き被下候御企の由妾に  
於ては此上なく辱く奉存候實に最良の英語の模型と  
も云ふべき御手紙の文體より貴下翻譯の御力量を察  
上候へば此事業の屹度成效すべきは疑もなきことに  
て妾は誠に欣喜の情に堪へず候  
此小冊子は實に驚くべき好結果にて現に印度などに

ては諸學校の教科書に採用致候由仄に聞及び候若し  
愚夫も今に存命中に候はゞ嗚ぐく已が蘇國學生の  
爲になしたる此著述の斯くまで廣く各國民の心中に  
到達せることを悦び候ひしなるべし是は實に亡夫が  
眞心もて人々を動かさんと勉めたる其熱誠の反響な  
るべしと存ぜられ候先は御禮旁右申上候

目出度し

エデンポロ市ワオーカー町三十番地

エリサベス、スチュアート、ブラッキー

一千八百九十九年八月一日

日本

田中一貞様

### 緒言

本書は故蘇國大學教授ジョンプラットキー氏著セルフ  
カルチュアを翻譯せるものにして、初學者若し此書を  
讀まば、幾分か原書自修の補助ともなるべく、兼て精神  
上大に裨益する所あるべし。然れども譯者は成るべく  
原文の意味を其儘に言ひ現はさんことを努め、一字一  
句も苟もせざらんことを勉めたるを以て、譯文隨て澁  
晦、自ら讀で自ら赧然たるものなきを得ず。去りながら  
忠實に原文を翻譯し、精密に原字を譯出して、兼て句調

を流暢ならしめんとするは余輩の如き非才の者の敢て能くする所にあらず。故に只出來得る限り。原著者の精神を傳へ出來得る限り。適切の文字を用ゐんとしたるのみ。讀者精讀して幸に教ふる所あらば、何の幸福か之に過ぎんや。

明治三十三年六月

譯者識

目次

|     |      |     |     |     |      |      |      |      |      |
|-----|------|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|
| 第一章 | 智育論  | (一) | 一   | (四) | 九    | (七)  | 二十五  | (十)  | 四十四  |
|     |      | (二) | 四   | (五) | 十四   | (八)  | 三十三  | (十一) | 五十一  |
|     |      | (三) | 六   | (六) | 二十一  | (九)  | 三十八  | (十二) | 五十五  |
| 第二章 | 體育論  | (一) | 六十七 | (三) | 八十二  | (五)  | 八十二  | (七)  | 八十七  |
|     |      | (二) | 七十六 | (四) | 八十一  | (六)  | 八十五  |      |      |
| 第三章 | 徳教育論 | (一) | 九十一 | (六) | 百〇九  | (十一) | 百二十三 | (十六) | 百四十二 |
|     |      | (二) | 九十五 | (七) | 百一十一 | (十二) | 百二十六 | (十七) | 百四十七 |
|     |      | (三) | 九十八 | (八) | 百十五  | (十三) | 百二十九 |      |      |
|     |      | (四) | 九十九 | (九) | 百十八  | (十四) | 百三十二 |      |      |
|     |      | (五) | 百〇四 | (十) | 百二十一 | (十五) | 百三十八 |      |      |

# 修養論

蘇國大學教授ジョン・フラツキ一氏原著

日本 田中一貞 翻譯

## 第一章 智育論

(一) 今の世多くは書籍を以て重なる教育の具となす。然り疑もなく書籍に智識を養ふには甚だ要用なる補助たるべく、又幾分か日用の技術學藝にも功用あるべしと雖も、さりとて決して之を以て教育の至要にして、且つ自然なる本源とはなし難し。(余を以て之を見るに、書籍の功徳は餘りに重要視せられ居るが如し)而して殊に書籍の欠くべからざる種類の學問中にありても、亦此弊を免かれざるに似たり

決して一を免れざるに似たり

even in a cuisine 72



り思ふに書籍なるものは如何なる方面より見るも、決して創造的の力あるものにあらず。只之れ物の補助として、機關として、器具として、多少の用あるのみ。而して器具の中にも、單に人間の手にて成りたる器具にして、天然の恩恵に依りて吾人が有する諸機能を輔翼するもののみ。故に書は之れ望遠鏡の如きのみ、顕微鏡の如きのみ。之を用ゆれば以て人間の想像だも及ばざる奇觀を見るを得べし。去りて吾人の生きたる目の用は少しも之が爲に減することなく、其働きは之が爲に少しも忽せに附すべからざるなり。蓋し智識本來の泉源は死せる書籍にあらずして、生きたる生活、經驗、個人の思考、感情、及び行爲に在り。故に人にして是等のものを基礎として進行せば、書籍は之を助けて罅隙を補ひ、粗笨を矯め、不足を充たすべし。爰を以て書籍は、其以て基礎とすべき生ける經驗なく

んば、耕さるゝ地面が徒に日光雨露に浴するが如く、何ぞ智識の繁盛を見ることを得んや。

文の流は極みなく、

人の渴きをどゞむてふ、

貴き川の水なるか。

實に世の中に學問の、

生ける力は、我胸の

底より湧くと知る人の

外にはおらじ、此道の

生ける力を知る人は。

是は餘程詩的形容に傾き居れども、其中には大なる一般の眞理の伏在するなくんばあらず。思ふに未だ嘗て鑛物を見たることなき人が、

如何に鑛物學の論文を読みたりとて何の役にも立たざるべし。詩文章も人生を解せぬ人を導くこと能はず、音樂も音聲を解せざる人を感動せしむること能はず。説教も精神に信仰なく、生活の純潔ならざる人を濟度すること能はざるなり。故に余は曰はんとす、凡て書籍より來れる所の智識は反射と、反響の力によりて間接に來れるものなりと。而して眞正の智識は之に反して自ら考察する所の精神に於ける生ける根底より發せるものなり。而して外より來る所の智識は只之を假に借用したるのみにて得らるべきものにあらず、生ける我身に生ける同化をなすことによりて始めて得らるべきものなり。

(二) 故に余は誠心より青年諸子に、成るべく直接に事實を觀察することに依りて、其研學の緒を開くべし、只齷齪として書籍のみを繰り返へす勿れと勸告するものなり。實に世に何よりも有益なる書は

「觀察」そのものなり。抑も如何に觀察すべきかなる語は、青年教育中尤も大切なる時機に於て、須らく指針として取るべき金言にあらずや。而して此大切なる時機は不幸にして人の多く輕々に附せし所なり。蓋し自然界に關する科學なるもの、殊に功力ある所以は、單に種々雜多の好材料を人心に供するが爲にあらずして、寧ろ凡ての技術中の最も大切なる技術、即ち眼を用うるの術を教ふるを以てなり。吾人は實に開ける眼を持ちながら實際何物をも見ずして過ぎ行くこと甚だ多きものなり。思ふに眼は他の諸官能の如く須らく練習すべきものにして、若し之を怠り書籍にのみ依頼する時は、漸く不活潑となり、遲鈍となり、果ては其天職を實行すること能はざるに至るものなり。されば普通學校と専門學校とに論なく、青年をして己れが見つゝある所のものを知得せしめ、學問に依りて始めて見る

ことを得る所のものを見るの法を教うるの學問を以て、第一の務となさるべからず。是を以て植物學、動物學、金石學、地質學、化學、農學、書學、及び美術の如きは、最も要用なる學問なりと云はざるべからず。されば、是等觀察上の學問に乏しきが爲に、一通り書籍をも讀みたる青年が、遙々ハイランド若しくは大陸に漫遊を試みながら、其收め得たる効果の案外に少かりしが如きは、共に其例甚だ多き所なり。

(三) 觀察は甚だ善し。而して緻密なる觀察は更に善し。去れど此曠漠たる宇宙、其森羅萬象を見來れば、その種類殆んど限あることなし、若し吾人にして或精確なる方法ありて、此萬象を整理し、之を取扱ふにあらざるよりは、吾人の觀察力は到底其勞に堪へずして、混亂顛倒するに至るや必せり。而して吾人は、實際此の如き整理的

方法を有せり。吾人は之を呼んで分類法と云ふ。而して此世界は天の理性の表明に過ぎざるを以て、此分類の手續は世界中至る所として、人間の理性によりて發見し得らるべきものとす。蓋し此法は、専ら天の理性が、萬物の上に與へたる原型の根本的一致を基礎とするものにして、此一致の實存することは、一見したる所にては甚だ異なるが如き物の間にも、類似の點あるによりて知らるべし。彼の善長なる觀察力を有する人が、依て以て萬物を、種と呼び、屬と稱する所の多少簡明なる形式に分配することを得るは、即ち此類似點あるを以てなり。而して此種屬等のものあるが故に、宇宙の諸現象は、自ら博聞聰明の學者に研究せらるゝに至る。故に學生の急務は、物を見るに先づ其類似點に注意し、同時に最著るしき差異を觀察するにあり。何となれば、此兩者の互に相離るべからざるは、影の形

に従ふが如きものにして、其差異自からは何等の實跡を有せざれども、各種類間の區別を立つるには欠ぐべからざるものなればなり。概して何事を研究するにも、先づ第一に發見せざるべからざる分類即ち順序は、自然的秩序にして、彼のいろは「字引若くは植物學のリネアン組織の如き、人工的順序の如きは、初學の徒には幾分か暗誦の助けになるやも知れずと雖、只専ら之のみ依頼する時は、却て眞正の智識を妨碍するものとす。去れば青年が須らく心懸くべきは、物の自然的連絡を辿りて、之を分類するの習慣なり。此習慣は萬物を廣く觀じて、其間の共通の結果を見、之と同時に之を、緻密に觀じて、諸物の特質を探ぐるによりて始めて得らるべし。俗人が附せる花の名稱の如きは、只外觀上の類似によりて與へられたるもの多く例へばウオータリー、(水百合の義にして河骨の事なり)の如きは、其名より推せばリ

、(百合)の一種なるが如く見ゆれども、其實は此二花の間には何の關係もなきものにして、植物學者が其構造を精査して、ウオータリー、(ト)をば罌粟科に入れたるは、大に理あることなり。凡て斯く交通機關の開けたる文明世界にありては、青年たるもの成るべく脩學旅行を企て、諸地方の博物館などを參觀すべし。而して其地に入りては、其地方に最も持有なる一物に留意することを要す。何となれば總てのものを見んとするものは、何物をも記憶せずして止むこと多ければなり。

(四) 吾人は更に慎重なる觀察と善良なる排列によりて得たる諸事實を基礎とし、所謂推理力なるもの、力を借りて更に巧緻なる組織を立つることを得べし。人は須らく物は斯くかくなりと知るのみならず、如何にして物は此の如くなるが、何の目的にて此の如きかを知

るべし。神の心は根本的に一致し居るを以て、物の依て以て存在し、依て以て生ずる所の手續も、亦一致するものにして、此一致や、即ち種及び屬の原型の一致に外ならず。而して吾人の神より受けたる精神も、亦根本的に一致せるものなるを以て、自ら吾人は神其者の一致の表明たる此種、屬の二者を研究せざるを得ざるに至る。即ち神の理性より出でたる吾人の理性は、常に萬物成立の一致を發見することに用ゐらるゝものなり。更に之を通俗に換言すれば、理性は吾人等が自ら生活の手續をなすに用ゐらるゝものなり。是を以て吾人は古人の所謂理中に存し、理に依て立ち、理の爲に存ずる所の世界の活動に於ける一致と、貫徹と、必然的關係とを研礎せざるを得ざるなり。

抑も、一大連鎖をなす所の萬物の一致點を研究せんとする人間の天性は、骨相學者が推因力と呼ぶ所のものにして、其此稱あるは、通俗天然の勢力が互に連續して現るは、に當り、其一の現象の原因は、直接に之に先つて起る所の現象なりと思はれ居るが故なり。凡そ何人に限らず、只何の説明もなく有の儘に事實のみを知るを以て満足するほど淺薄なる人は稀なるべく、之に反して吾人は皆物の原因を發見せずして止むことを嫌ひ、事あれば忽ち之に假定の原因を附す。是れ能く原因を求むるは、苟も痴人狂人にあらざる限りは皆人の天性なることを證するものにあらずや。此事に關して、青年諸子は容易に偶然の關係若くは事情を直に原因と即斷するが如き習慣に陥らざるやう注意せざるべからず。若し夫れ英國西岸に雨量の多きは、其大西洋に濱するに依ると、若くはオーバンの冬のアバーデーンに比して比較的に温暖なるは温暖なる大潮流が、メキシコ灣より寄せ來

るが爲なることの如きは、之を知ること、さして困難にあらざれども、道徳政治の事に至りては事實往々錯雜して、加ふるに感情の力激烈にして、其議論の如きは事實間の因果的關係を説明せずして、妄に論斷するの弊に陥るとあるは吾人の常に見る所なり。余嘗て有名なる一政客が種々の論鋒と例證とを用ひて、我邦の不幸災害は皆其君主貴族的政體より起るものなることを述べ、若し此政體を破壊して純粹なる民政を立つるに於ては、妖術家の捧頭觸るゝ所忽ち災難を打拂ふが如きものあらんなどと喋々と論ずるを聽きたるとありき。此の如き議論は妄に社會災害の原因と假想し、更に同儕に不確實なる救治策を假想して、之を除かんとするものにして、其論旨の取るに足らざるは云ふを待たず。余は青年の推理力養成法として、第一ニプラトニの方策に隨て、暫くの間専ら數學上の脩業をなさんことを

を勸告するものなり。何と云へば、此學は凡ての推理に必要なる心の結合力を強くし、無經驗の徒をして物の必物的關係、不可避的結果、若くは純粹なる因果法とは如何なるものなるかを會得せしむるものなればなり。然れども決して數學のみを以て満足すべきにあらす。數學の推理は理論上の條定及び條件の上に立つものにして、他の影響混淆に遇ふことなきものなれば、彼の種々の原因によりて妨げられ、奇怪に動き、奇怪に反動する所の事實と勢力の上に立てる世界、哲人賢者も屢々岐路に迷ふことある人生の大舞臺に對する練習として、未だ適當ありと稱すべからず。固より政治道徳其他社會上の問題に對する吾人の推理は、數學に於けると一樣に精確あることを得べく、只其少しく異なる所は稍々錯雜にして含蓄する處多き事のみ。故に社會上の問題に於て吾人の大に避けざるべからざる

難關は、偏頗なる觀察、輕卒なる論定、及び情實黨利より來る所の迷執之れなり。その政治家が政治問題を誤解するは學問の不精確より來るにあらずして、専ら事實を知ることの不充分なるか、若くは人情及び利害の爲に事實を正當に酌量するの明を失ふかに依る。

(五) 是に於て青年の人は恐らくは余に向て問はんとす、「君は推理力養成の爲に、論理學純正哲學等の形式上の學問を始むべしと勧めらるゝや」と。然り若し其青年にして學校風の人工的方法にあらざる自然的方法に依りて、已に先づ一般の思考及び推理の習慣を養ひ得たりしならんには、余は之に對して斷乎として然りと答ふべし。見よ人は最初に足を有するに依りて歩むことを學び、次に之を使用するによりて歩むことを得、歩むことを知りて後其道の人に就きて進行の歩調を習ひ。歩調を習得するに依りて始めて種々の軍隊上の駆引

を行ふことを得るにあらずや。誰か歩調の經驗もなきに始より駆引を知ることを得んや。思考の術も全く之に同じ。即ち第一に思考力を有し、次に思考すべき多くの材料を有し、次に論理學者の許に至り己れの推理の手續を精査するの法を問ふべし。斯くしてこそ論理學研究の大に効力あるべきは疑を容れざる所なれども、此等も其實は數學と同じく實際の容量を有せず、只凡て思考の依て以て行はるゝ所の一般の形式を順次に示すのみのものであるを以て、論理學に依り人生てふ大果園に於て、良果實を結ぶべき豊富なる思想を發生せしめんと望むは、勞して功なき業なり。故に單純なる論理によりて大思索家となり得へくんば、世の劍客は忽ち皆アリユースワレーアの如き大愛國者となり得べき筈なり。是獨り論理學のみならず、凡て形式上の學問は皆此の如きものにして、文法學も無効なり、修

辞學も無効なり、彼等は只人間日常の生活より得らるゝ所の材料を  
 處理する爲に効力あるのみ。瘦瘠狹隘の精神は、思想の規則を學び  
 たりとて豊富肥大となること能はず。之に反して強烈なる活力と、  
 普及せる同情と、精密なる觀察と、廣濶なる經驗とは、凡ての學校  
 の論理學を總括せるほどの價值あるべし。去りながら余は論理を以  
 て全然無用の長物なりとするの意にあらず。此學素より創始の効こ  
 そなければ、整理の効を有するを以て其思考に必要なこと、恰も解  
 剖學の繪畫の必要あるが如くにして、能く思想の關係連絡を明確に  
 するものなり。然れども論理自からが眞の智識を生ずる能はざるは、  
 恰も解剖學が優美なる繪畫を生ずること能はざるが如し。固より論  
 理は誤謬を正し、詭辨を破るに當りて大効あれども、吾人が眞理  
 の蘊奥を探究するに當りては、其動力を別に生命ある泉源より借ら

ざるを得ず。此泉や生命ある宇宙の事實より流れ出づるものにして、  
 決して死せる學校や、博物館などより來るものにあらず。純正哲學  
 も亦然り。抑も此學の要用なる所以に二あり。一は吾人に人間能力  
 の超ゆべからざる界限あることを教へ、吾人をして自ら虚傲の心を  
 屈せしめ、少しく思考の海底を浮沈するの後、世界は吾人の想像せ  
 るよりも更に廣大にして、之に關する吾人の思想の案外に微少なる  
 ことを感ぜしむること是なり。是單に消極的の效能のみと思ふ人も  
 あるべけれど、消極的なりとて其要用なる點に於ては少しも異な  
 るべき筈なし。何となれば、界限を知るとふ事は智識の第一條件な  
 ればなり。その古のイカラスの如く鳥の眞似をなし、却て海中に墜  
 落して後世の物笑となれるか如き痴狂を學ぶと、自らの分限を知り  
 て陸上を着實に歩行することを練習すると、何れを勝れりとするや。



今一つの効能は全く積極的のものにして、即ち吾人をして凡ての科學の基礎たる根本的原理と相密接せしむること之なり。思ふに此學は論理の如く純粹なる形式的科學にあらざして、却て人間の精神が容貌骨格の基礎をなし。其永久の原型として他の變遷に伴はざると一般、宇宙の現象の基礎をなす所の根本的、本質的實體の學問なり。換言すれば諸學科に依りて表せらるゝ所の個々の現象を透過して、更に其源を探ぐるに及びて、始めて到達する所の學は即ち純正哲學なり。故に純正哲學は植物學にもあらず、生理學にもあらず、地質學にもあらず、天文學にもあらず、化學にもあらず、人類學にもあらず、宇宙の間に遍在し天地萬象を支配する所の一般の勢力本質を取扱ふものにして、諸科學の如きは此勢力本質の一部の發現を攻究するものに過ぎず。故に純正哲學は萬物の共通的要素にして、萬物

は自ら推動する所の道理の大開展に過ぎざるが故に、(若し根底に横はる所の道理あるもの徴せば、世界は世界にあらずして、混沌界たりしならん)純正哲學は、吾人に賦與せられたる限ある理性の力によりて、知られ得る丈けの絶對的、即ち世界的道理を研究するの學問なりと云はざるを得ず。故に昔アリストトールの曰はれし如く、此學は神學と同一なりと云ふを得べし。實に神を以て自主自在の絶對的道理なりとするの觀念は、世界あるものを解釋し得る唯一の觀念にして、ピサゴラスよりヘーゲルに至るまで、世界のありとあらゆる大思索家が、凡ての健全なる思考の唯一の基礎なりとして、之を確守せるは其當を得たるものなり。去れば是非とも純正哲學は攻究せられざるべからざるものなり。而して我國近代に至り理學上の大發明陸續として興り、大に人心を引き、加之ず一般に人心は外形

上の事、物質上の事に傾き易く、甚だしきは智識は只理學によりてのみ得らるべし、最も貴重なる實物を打出す所の打出の小槌は、歸納法に外ならずと思ふ輩も少からざる折なれば、殊に現代の我國人は之を學ぶの要あるが如し。思ふに歸納法を以て唯一の學問と思ふは、淺慕なる狂愚の沙汰にして、凡ての科學の依て以て存在する所の根本的活眞理は、凡ての歸納法の行はるゝ前に確定せらるゝものなり。彼の物質上の學問の如きは、只物の連關を示すに止まるものなり。然るを淺見の徒は、直に之を以て眞正の原因なりと誤認するなり。抑も彼等の所謂理法なるものは、萬物運動の方法に過ぎず。然らば其之を運動せしむるものは何なりやと云ふことは、理學の範圍内にては説明の出來ざる所にあらずや。實に此運動を起す所の者こそは、何れの時と何れの處とを問はず、絶對無限、在まざる所

なく、適せざる所なき道理に外ならず。而して此道理を指して、吾人は之を神と呼ぶ。吾人は希臘の敬虔なる詩宗が歌へる如く、皆此神の子孫にして、又彼の大使徒が説きしが如く、吾人は神の中に生活し、神の中に行動し、神の中に存在するものなり。是を以て純然合理的にして、純然敬虔なる思索は、此純正哲學に外ならず。而して青年諸子が此學を始むるは、學校に於てするを可とすれども、進で其妙理を發見するには、眞摯にして男らしき、生活の經驗に依らざるべからず。而して古のタヅヰッド王と其信心深きヘブリユ一軍隊との如くに、靜肅なる信仰の上に安息することを得るに至て、始めて此眞理を發見し得たることを自ら悟るべきなり。

(六) 次に特別の練修を施さるべからざる能力は想像力なり。余は恐る、世の教育家及び學生が、充分此能力を練修するの必要を感ぜ

ざること。中には想像力を以て、事實よりは寧ろ小説に關する能力にして、精密なる科學上の智識を養ふべき嚴格なる學生に對しては、何等の價值もなきものなりとして、全然之を輕蔑するものもあらん。然れども是甚不可なり。古來第一流の科學者とも云はるゝ人が、大發明をなすに至るは、多く活力ある想像力の提醒に依るものにして、詩人ゲーテが植物學及び骨學に於て斬新の觀察をなせるが如き、能く之を證明するものと云はざるを得ず。故に想像力は、道理に反して專横執拗に働く時にこそ、科學の讐敵なれ、一旦之と一致して働く時は、反て其最良最要の味方なり。加之ず、歴史、其他凡ての具象的事實の研究に於て、想像力の必要なることは。詩歌と異ならず。勿論歴史家妄に事實を捏造すること能はずと雖も、彼等が能く事實を蒐めて、之に連絡を與へ、矛盾衝突なき様之を整理す

るは、全く想像の力に依るものとす。彼神仙談、小説、物語等は皆夫れに効用のあるものにして、之を以て想像力練修の用に供するは可なれども、其最も此能力を養ふに必要なるは、事實上の攻究に意を用うるに在り。故に余は此能力を養はんが爲には、重に事實の研究をなすべしと青年諸君に勸むるものなり。蓋し人の空想を樂ましめ、想像を養ふの効ある、人の性格、運命等を描き出せる所のものを見んと欲せば、必ずしも小説を読むを要せず。彼アレキサンダー大王マルテンルーサー、ガスタヴァスアドルフアス、其他世界の活劇場理に於て、自ら新時勢を造り出して、其代表者となれるほどの大人物の傳記を読むべし。是等は想像養成の爲には古來の最良なる小説よりも、否寧ろ古來の最良なる詩篇よりも、教化の効あるものなり。詩を讀みて快を感じざる人あるも、偉大顯著なる事實を

讀みて感奮せざる人はあらじ。思ふに君子英雄の傳を讀みて、想像力を練るには兩得あり。即ち一舉にして己に古人の爲せる事實を知ると、吾人の將にあすべき所のものを學び得ると之なり。去りながら、眞に想像力を養はんとならば、是等の快活なる空想の活畫を心裡に浮ばしむるを以て足れりとするべからず。何となれば此の如き受動的の狀態は、一の活力をも與へざるものなればなり。故に學生は是等心中の活影像を正式に確く把持して、一旦其書を閉ぢたる後も、再び隨意に、其同じ想像をして、皆夫れに適當の順序と、適當の特風と、適當の態度形容を以て、完全なる行列をなして、現はれ出でしむることを得るまでに至らしめざれば、決して満足すべからず。世には開ける目を持ちながら、何物をも見得ずして一生を空過する人あると一様に、萬卷の書を讀破し、種々雜多の事實を以て腦

隨に詰め込みながら、其中より、事なき時は想像を樂ましむべく、事ある時に際しては精神の屈撓を拒くに足るべき、一の活畫をも心裡に收め得ずして、空しく勞するものあり。去れば諸子が一の良著書を読みたる時は、其紙上の文字を忘るゝも可なれども、必ず自ら如何なる活畫を我想像中に描き得たるやを考へ、且つ其想像を明瞭に保有し、其體形をして充實ならしめ、其彩色をして鮮明ならしむる様注意せざるべからず。只夫れ其事實の起りたることを知るのみなる時は、自ら以て知れりとする事なかれ。其事實を今尙目前に見得るが如きに至て、始めて之を知れりとせよ。

(七) 抑も想像力なる語は、皆人の幾分か所有せざるものなき一個の能力を指すものなりと雖も、殊に吾人が適當の英語なきを以て、假に希臘語にてエツセチカル(美的)なる形容詞を付して呼ぶ所の知覺及

び情緒と相聯關するもの、如し。尤も家屋は外觀の美なくとも、充分に雨露を凌ぎ、光線の透入を良くし、立派に住居に充て得べきが如く、人間も全く想像力を欠きたりして、其生命を有ち、毅然として獨立の生活となすことを得べし。去りながら、若し美麗なる家屋を得べくんば、誰か好みて其醜穢なるを取るものあらんや。是と同じく、苟くも生存の大目的を遂行せんと願ふもの、(出來得る丈の良生活をなさんとするもの)誰か健全なる想像力の天然的食物たる美其者を欲せざらんや。果して然らば已に云へる如く、人は書籍のみにて生活し能はさると同じく、又決して知識のみにて生存すること能はさるを知るべし。「物を知るは常に可なり」とは近世最大哲人の一人が説かれたる所なれども、其意義は決して、何の分別もなく無暗に物を知るは常に可なりと云ふにあらず。其眞意は、只何物にても

眼に觸るゝ所のものあるときは、何ぞの用に充てん爲に、注意して之を心に記すべし、必ずしも其物が、最も善良なるものなることを要せずと云ふことなり。勿論最も善良なるものは願はしけれども、去りて此の如きものは常に我手中に入るものにあらず。之に反して最も不良なるものにして、吾人の之が爲に屢躓つく所のものと雖、其中に悔るべからざる良要素を含まざるはなし。故に青年の人が、常に正式に研究すべき目的は、一般の知識、若くは無分別なる智識にあらずして。必ず偉大、優美、善良なる物に對する智識ならざるべからず。而して想像力に關する斯かる智識は、特別に智力の美的練習を勉むることによりてのみ得らるべきなり。換言すれば詩歌、繪畫、音樂、其他一般に凡ての方面と、凡ての形態に於ける崇高と、美とを發表するを目的とするところの美術は、是決して不緊要のもの

にあらす。是非とも脩養ある人の欠ぐべからざる、最も貴き美花とも云つへきものなり。夫れ炯眼を以て能く物を知得し、確乎として事を取るを以て唯一の能事とする人は、世界の俗事に成功することを得へしと雖、多くは愛嬌に乏しく、四角四面にして、我意を張り、頑固窮屈妄に議論を好み、差耻の念薄く、時としては驕慢の心強きものなり。故に少しく美學上の教化を興へて、かゝる人物をして、其圭角を落さしめ、以て之を圓滑の人となすは社會の爲に少なからざる利益にして、又其人物自らの爲にも、大に快樂を興ふるの源となるべし。故に先づ第一に青年の人をして、凡ての美なる事物中に其想像力の滋養を發見して、自ら養ふ所あらしめよ。例へば市中に近頃美麗なる家屋の建築せられたりと聞かば、直に青年をして其下に至り之を諦視せしめよ。若し繪畫の展覽會などあれば、行て以て

之を瞥見するの暇もなきまで、青年の業務を多忙ならしむることなかれ。若し又巧ある曲馬輕業等の來るあれば、彼等をして是等のものは、小供誑しの戯に過ぎずなど、思はしむるなかれ。是等の技術は人間五體の、驚くべき力量と、敏捷とを巧に彰はすものにして、心あるもの、皆感歎せざるを得ざる所なり。之を要するに、智力上大に得る所あらんことを望む青年は、大に欽慕の情を養成すべし。何となれば吾人が優美なるものを見て之に倣ひ、幾分か之を成効することを得るは、全く其物を欽慕するの情あるが故なればなり。而して此壯麗偉觀なる宇宙に生れて其美に驚かざる人あればとて、之を以て直に宇宙には驚くべきほどの偉大なるものなきの證とすべからず。たまく、是れ其人の同情心微弱にして、胸域の狹隘なる事を示すのみ。故に苟も自然の法に従て我身の美的練修をなさんとす

青年が、妄に批評を始め、「何物をも欽慕することなかれ」と云ふ無益の意地を立つるは、此上なき過ちにして、此の如き格言は古の大儒者輩などには幾分か恕すべき廉もあれども、前途望洋々たる青年が、之を口にするに至ては、最早言語同断と云はざるべからず。凡そ已れは何の纏りたる事業をもなさで、只管他人の欠點を拾ふを以て已れの定業の如く考へ、傲然之を批評など、稱する所の青年には、何の取るべき點もなきものなるが故に、青年たるものは決して人の欠點を拾ふことを勉めずして、専ら其美點を見んことを學ぶべし。眞に其名に負がざる批評なるものは、透徹の識見と、長日月の経験とが相合して生したる美果に外ならず。思ふに數度の戰場を蹈みたる老武者にして始て戰を説くべく、青年もどより又其自説あるべく、又自説なかるべからずと雖も、彼等は公然之を上梓して、世に示す

べきの理あることなし。経験の素要なき人の論説を出版するは何の益なきのみか、却て公衆の心を迷はし、記者其人の精神を汚穢せしむるに終るべきなり。

余は既に、天然及び人工の崇高及び美は、美的能力の健全なる自然的食物なることを述べたり。而して彼の滑稽頓智の如きは、只之を補助するの効あるのみ。思ふに人が全く笑ひ能はさることあらんには、そは其人に取りて甚だ悲むべきことなれども、凡そ笑は只心中の不調和を軽く拂ひ去るの効あるものにして、其用は只其不調和を増進せずと云ふに止まる。人生は實に眞面目の一事業あれば、朝夕只其笑のみを事として、大事業大善業を遂げたる人あるを聞かず。是を以てアリストコエニースの如き大頓智と雖も、其効は只ブツデングに鹽梅を施し、パイに薬味を加へたるが如きに過ぎざるのみ。

誰か單に胡椒とヴァニラのみにて生活し得るのあらんや。去れば青年の人は須らく、其精神中に、コペンハーゲンにありと云ふトルワルドセンの博物館の如く、和氣満々たる基督及び十二使徒の高風より、輕快なるキュービッド、ヒポカムバスの美德に至るまで、凡ての種類<sup>の</sup>透逸なるものを具備することを勉むべし。然れども決して意味もなき滑稽諷刺等に耽りて、我心を汚すことなかれ。世に物の可笑しき方面のみを見るの習癖ほど、其心の淺薄あるを證明するもの<sup>は</sup>なし。アリストートルも、可笑しきは常に物の外皮に存すと云はれたり。現時我國にて非常に流行する滑稽小説、人物端評の如きは、善良なる喜劇と同様折々の慰みに用ゆるは可なれども、美術上の實習或は其研究は、さもなき人物、卑斥すべき小人などの可笑しき端評なとよりも、遙に健全にして斬新なる慰藉を眞學生に與ふる

ものなり。又ピアノに向ひて清爽なる一曲を弾じ、若くは古聖賢の金言を優雅なる韻文に譯するも、世の所謂娛樂の書類を讀むよりは、平生の科學研究に疲れたる精神を慰むるに適當あらん。實にかの娛樂の書類の如きは専ら精神の鬱々として、心氣極めて懶き折にのみ適せるものなり。

(八) 次に特別の練習を要する能力は記憶あり。寶を集めて之を蓄ふる能はずんば、始めより之を集めざるに如かず。學んで之を記憶する能はずんば學ぶも何の効があらん。幸あるかな此力は最も確に練習に依りて進歩すべき所の能力にして、加ふるに遲鈍なる記憶力は、微弱なる想像力や、淺薄なる推理力が有せざる所の輔翼物を有せり。爰に一度想像上印象せられたる事實を記憶せんと欲せば、是非注意せざるべからざる要件を擧げん。(い) 其印象の判然たるべきこと。



鮮明なるべき事、強烈なるべきことは甚必要な條件にして、隨て只朦朧と理會せることを記憶せんと望むは、無益の事と云はざるべからず。何となれば、急速に打續きて心中に流れ入る所の曖昧微弱なる數多の印象は、忽ち烟霧の裡に消滅して其跡を絶つべければなり。去れば凡てのもの、混淆せる觀念を得んよりは、單一の大事實に關する明確なる觀念を有する方遙に記憶の爲に宜しかるべし。(ろ)

蓋し秩序と分類ほど記憶を助くるものはあらじ、天地の廣き一々萬物を數へ來らば到底際限あるべからず。然るに種類は數少く、加ふるに物の最も顯著なる特性を知らしむるものなれば、之を記憶するの勞力は最も輕きが如し。(は)次に必要なるは反覆復習することこれなり。凡て物に爪の立たざる時は、數度繰返へして打搔かば、遂には深く其跡を刻することを得べし。記憶も亦然り同事を執念く

繰返へすときは、何事も深く恐るゝに足らず。例へばデヴァなる語は神と云ふ字に對する梵語なることを記憶し難き事あらば、一日に七たび若くは一週間に七度、之を繰返へし讀むべし。然らば決して之を忘却することは無かるべし。故に天性健忘なれば健忘あるほど自ら鍊修して之を輔ふの決心なかるべからず。思ふに人の能力は足遅き牛馬の如く、屢々之を鞭撻するにあらざれば少しも進歩せざるものなり。(に)又記憶の力に乏しきものは、概して推因力に富むが如し。故に此力を善く應用すれば、外見の禍却て實際の幸となるべし。夫記憶力の鋭敏なるものは自ら之に満足して、鸚鵡の如くに我記憶力を吹聴して、空しく俗人の喝采を貪ぶること多し。之に反して適當の理屈なくして、容易に事實を記憶すること能はざる人は、必ず其事實の因果的連絡を尋ねて、以て之を心に銘するなり。(ほ)

連想を助くる人工的連絡は時として効用あるものとして、例へば小兒がアピドスはヘレスポント峽のアシア岸にあることを記憶するが如き場合はなり。然れども此の如き拙き工夫は不熟なる保母などに相應はしき方法なれども、堂々たる士君子の用ゆべき所にあらず。又彼記憶術を正科として學ばしむるが如きは、些少の効もあるべしと覺えず。是等のものは能力の自然作用を妨害する所の、無意味なる奇怪の號を以て精神を充たすものと云はざるべからず。又歴史上の年月を暗誦するには、普通に此類の方法を用うれども、矢張り之れも原因結果の關係に依る方良策なり。又然らずとも例へばソクラテスの酒杯を傾けたる時、プラトンは二十九歳にして、プラトンの弟子たるアリストートルは、彼亞細亞の大陸を蹂躪して、遂にプラト

手せしめたるアレキサンダー大帝の師傳なりきなど、英雄の偶然的關係に依りて暗記するも、彼器械的方法よりは遙に可ならん。(一)  
最後に曰はんと欲する所のものは、如何に敏捷なる記憶を有する人も、決して記録物の記憶補助の効あることを忘るべからずと云ふことなり。勿論草稿を前に置きて演説杯をなすは記憶を進めざるのみならず、却て時々之を薄弱にするの傾向ありと雖、若し多く寫本取本等を蓄へて、必用の場合には容易に使用することを得る様になし置けば、充分文章などに豊富なる材料を得て、大に便益を感すべし。斯かれば青年等は何よりも早く、或は書入をなし、或は書籍の索引を作り、或は類似の法を以て参考に便利なる様、表を作るべし。又説教師などが書入のある經典を有し。又其中の適宜の警句などに、記憶の便となるべき實例、又は故事などを書き加へ置かば、其毎週

の説教は大に光彩を増べし。若し彼等にして此方法を採用せば、如何に記憶の悪しきものなりとも、一般説教中の尤も無味且つ糢稜たる部分を適切なる古今の例證の力に依り、大に價值あるものとなすことを得ん。其他政治を研究するもの、能くアリストートルの「政治學」などに書入をなさば、大に自ら利する所あるべく、又最近の政治上の事にのみ通じ居るよりして、兎角自ら傾き易き固陋偏見の弊を避くることを得べし。

(九) 最も緊要なる事柄にして、然かも學校教育に於て兎角輕視せらるゝ所のものは、思想を文雅に爽快に且つ有力に云ひ表はすの術之なり。故に余は文牋及び演説に關して、少しく論ずる所あらんとす。益し人は天然談話の動物にして、善良なる文牋とは畢竟、善良なる練習に依りて、自然の能力を發達せしむるより起る所の説話法の熟

達に外ならず。故に文牋を練習するに最も良好なる方法は能辨家文章家と親しく、交際するにあるは勿論なり。概して人の用語は多く其人の交際する社會の如何に依るものにして殊に其少年時代にありては、全く之に依りて左右せらるゝものなりと云ふも過言にあらず。故に精神の最も高尚にして最も辨論に巧なる人の傑作を讀むべし。さすれば自ら其人の長所を自得するを得ん。去りながら、人の口調を卑劣にも其儘奴隸的に摸倣するが如きは、大に賤むべきことにして、人には皆夫れ、<sup>く</sup>に特色あること恰も其容貌の相異なるが如くにして、決して之を變せんと欲するも變ずる能はざる所なり。然れども文牋は全く其人の觀念と別々に養成せられ得るもの、様に心得て、余り之にのみ汲々たるは甚だ不可なり。去れば先づ精巧に論述せんことよりは、審ろ重要適實なる思想を有せんことを心懸けさ

るべからず。彼のソクラテスが有望ある希臘の青年等に、「人語るべき思想あれば、之を語るの方法は自ら知らるゝものなり」と教へられたるは、大に味のあることなり。又使徒パウロも同様にコリントの耶蘇教徒に教へたり。又近くはゲーテは獨乙の學生に賦めて曰く。

正しき獲物をもとむべし、

淺瀬を探ぐる墓なきよ。

思ひ心にあるときは、

云ふべき道は、自から

人の掟を待たずして、

浮ひ出づべきものぞかし。

汝そが舌の根汝が胸に

忠誠まことなりせば、苦みて

言葉を探くる要あらじ。

然れども以上の事柄を心中に收めたる上にて、汲々文牀の要素たる明晰、寛易、深重、變化等のものを巧に調和して、我思想を紙上に現はすの術を學ぶは此上なき良策なり。去りながら物を書き出すと云ふことは、我國の教育ある紳士、否寧ろ世界中の普通人に對しては、畢竟演説をなすの一階梯のみ。苟も自由國の人民たるものは、獨り説教師辨護士政治家等の専門的演説者のみならず、皆時々公衆に對して意見を吐露するの要あるものなれば、早く演説の習慣を養はざれば、年長くるに従て漸く辨論に澁苦を感ずるものなり。而して此澁苦は多く自ら求むる所のものなりと雖も。其澁苦たるに於ては、自然的の澁苦と少しも異なることあることなし。故に速に演説の實習を始むること、及びなるべく草稿に依頼することを避くることは

最も必要なり。故に彼の草稿にのみ依頼するの習慣は。曾てプラットの豫言せる如く。今日幾多の教育ある人の演説をして、無智の蠻民よりも、不自然に且つ咄辨になしたる所のものなれば、今日の青年たるものは須らく順序よく、己が觀念を配列し、草稿の力を借らずして能く之を心に留むることを練習すべし。彼時々目印に重なる言葉を紙片に書き附け置くが如きは、始の程は記憶を助るに便利なるべけれども、成るべくは此方法を用ゐざるを可とす。而して演説中は常に聴衆に對して正面に向ふ習慣を得ることに注意すべし。此の如きは首を傾けて草稿を見るの要あるもの、決してなし難き所なり。故に若し此良習慣を得んと欲せば、蘇國諸大學の長所たる討論會こそ云ふまでもなく無比の良法と云ふべけれ。夫れ練習なるものは熟練を生み、熟練は自信力を生むの母なり。その青年が始めて演

欠

MISSING

あり。即ち「アル」to beと云ふ動詞の如きは、殆んど凡ての國語に於て見る所の好例證と云はざるべからず。

(ぬ) 最初に簡易なる物譚類を讀へし。又希臘語にてゼノフォンのアナキシス、メモラヒリア、セペテスタ、プラ、或はルシアンの間答篇の如き通俗の對話體の書を讀むこと更に妙なり。

去れど讀書を以て唯一の業として、之を以て思考談話の代用となすが如きは、世に能く見る所なれども、これ大に不可あり。此弊を避けんが爲には、博物學上の實物、或は興味ある物體の模寫物を取り自國語を一切混ぜずに、單文章にて明瞭に其諸部分を説明するが如きは最良の方法なり。

(る) 讀方及び説明等の實習は、再三再四繰返へすべし。苟も語學研究の初期時代に於て、適當なる書籍をば、決して一度讀過したるの

みにて放棄することあるべからず。

(を) 若し出来得べくんば、讀書は常に吾精神上の嗜慾と一致する様にすべし。即ち其書中の事柄は面白きを可とす。然らば其進歩は必ず倍蓰すべし。又書中に記せる事柄に就て多少前以て知る所あらば、非常に助となるべし。故に吾人蘇國人の如き基督教徒に對しては、聖書の翻譯書の如きは外國語の研究には最も良好なる書籍の一たり。

(わ) 讀書の際には外國の特別用語イヂオムと、自國語の特別用語とを注意して區別すべし。外國語の特別用語には、鉛筆又はペンにて明瞭に、全く自國に特有なる譯語を記入し、數日の後其譯語を再び原語に反譯し見よ。

(か) 我觀察を整頓せんとするとき、又は之を修正するの必要なる時は組織の立てる文典を見るべく、且つ自ら認めたる効果ありと思ふ間は之を廢すべからず。去れど文典は成るべく實地よりも後にすべきものにして、決して之に先たつべきものにはあらず。

(よ) 多くの文典にある所の、單に形式的ある實習上の通則のみを以て満足せず、其一般の文典に屬するものと、特種の文典に屬するものとの論なく、常に飽く迄規則の原理を見出さんと努むべし。

(た) 言語の學理、話法の構成、及び比較協言學、又字義學と稱する所のものを研究せよ。斯くして發見し得たる原則は、合理の理解力を以て語學を研究するに甚だ好都合のものあり。若し此原則を知らざる時は、専ら記憶の力に依頼せざるを得ずして大に力を勞することとなるべし。

(れ) 去りながら語學研究の重なる部分は實習にあり。即ち言語は先づ習熟を要す。而して此習熟は絶へず、讀書をなすこと、絶へず



會話を試むることに依りて得らるべし。若し又共に語るべき人なければ、獨り喋々語るもよし。而して語學に於て訓練すべきは只目と理解力のみにあらずして、耳と舌をも大に練習せざるべからず。讀書に於ては人必ずしも標準となるべき大家の大著述のみを読むを要せず。何なりとも手當次第に貪り讀むべし。而して書籍を細密に詳讀するは一の特別の勉強としては甚だ可なれども、始の程は先づ言語の大體を酌み取るを可とす。其細密なる點は、其言語を大抵流暢に使用することを得るの後に至て、研究すべきものとす。例へばセクスピアの如きは其本文に關する諸説を調べ、或は諸批評家の奇警なる評説を研究するには、先づ豫め之を二十回も通讀せざるべからず。

(そ) 正當なる意義に於る作文とは話法、讀書、及び先にも云ひたる如き翻譯重譯の實習等の窮極點にして、是れをなすには必ず一の模範に依らざるべからず。妄に字書又は熟語集などに依頼せず必ず、一文體の模型たる所の大學者の文を撰び、(例へば哲學上の對話體の文にてはプラトール、滑稽的對話的の文にてはルシアンの如きこれなり)其句を借り、決して國語を交えずして、直接に之が模倣を試むべし。斯くして漸く文辭流暢なることを得たる後に、漸々其文體に我時色を加へば、遂にエラスマス、ウヰツテンハツハ、或はルンケンが羅甸文を書きたる如くに、優美に外國語を綴ることも強ち難からざるべし。又我國文を外國文に翻譯することも甚だ可なれども、是は最初に於て試むべきことにあらず。何となれば國文翻譯の如き困難なる技術を成効し得るには、必ず豫め直接に外國語を模倣することに依りて、其聽官を修練したる後からざるべからざるを以てなり。

## 體育論

抑物あれば必ず其立つ所の基礎、其生ずる所の根本、其轉ずる所の樞機なかるべからず。語を換へて之を云へば、何物にも其全體に對しての地位如何に低くとも、其實その全體の存在の、依て以て係る所の欠くべからざる要素なかるべからざるは、數學上の理論の正確なるが如くに、正確なる事實なり。例へば家を立つるに欠くべからざる基礎の如きは別に獨立の効用あるにあらず、且つ最も完全に出來上がりたる基礎は、一般に自から跡を没して外面より見えざるものなり。而して此家と基礎との關係は、確に人間思考力と健康との間に存する關係と等しきものなれば、若し此比喻にして正當ならば、學生たるものが第一に肉體の健康に注意せざるべからざるものなる

や明けし。去るにも係らず、實際は之と反し、衛生即ち肉體の合理的管理をは、學生が眞面目に考ふることの最も稀なるは人の皆知る所なり。而して勉強なる學生ほど益々衛生を怠り、恰も信號なき瀛車の如くに、何時の間にか危嶮極まる斷崖の邊に走り、退かんとして退く能はず、看るく不幸の終を遂くる事多きを見る。是を以て學業に就かんとするものは、先づ凡ての經驗か證する如く、一般の坐業、殊に絶えず烈しく精神を勞する所の坐業は、皆多少衛生に害あるものなること、及び天性柔弱あるものは屢々讀書の生活を送らんとする傾向あるものにして、斯る青年に於ては讀書生活の直接に其能力を弱くし、身體を毀損する傾きあるものなることを確信して、而して後に其事に従事するを良策とす。斯る先輩の忠告を聽きて後は、各人自ら良工の器具を精銳にせんと心がけ、勇卒の彈藥を濕さ

いらんと注意するが如くに、確固たる目的を持して日夜我身の健康に注意せざれば、血液は皆頭腦に澁滞するに至るべきことを忘るべからず。是に關して余は次に數章を設けて、經驗上最も實功ありと知り得たる所を記せんとす。

(一) 人身肢體の成長及び強健は、實に宇宙間の萬物と等しく皆運動に起因するものにして、畢竟總ての生活は一の活動即ち動作のみ。其絶對的の靜止の如きは只墳墓の中にのみ存するものなるが故に、人の活力の量は、則ち其働作の量に外ならずと云ふべし。是を以て吾人若し己れの身體の各能力、各機能をして能く調和して、其働作をなさしめんとすれば、身先づ健康ならざるべからず。健康にして且つ宏大の活力を有せんには、身必ず強壯ならざるべからず。凡そ人は強壯ならずして單に健康なるものあれとも、總して健康は多少強

壯に傾くものにして、病痼は凡べて虚弱に伴ふるものなり。又何人と雖も物は單に生長することに依りて生長すてふ事は自然に知り得らることなるが、扱て此生長とは活動力即ち榮養力の間斷なき動作に外ならず。是を以て此力の動作を禁止し、若くは減却廢滅せしむる所のもの、例へば烈風嚴霜の如きは其發達を害し、其生産を杜絶すへし。故に學生は椅子に椅子、机に凭れて、書籍を熟視するは決して身體の成長を助くる所以にあらざることを得べし。その血液の能く循環し、筋肉の働の自由なるは是れ只運動にのみ依るものなり。若し此運動を怠らんか、天然は嚴正欺くべからざるものなれば、忽ち其報あるべし。依て學生は毎日少くとも二時間は戶外に運動せんとを嚴かに決心せざるべからず。若し之を怠らば足部は冷却し、身體内部の諸機關は澁滯し、消化機及び腦部に種々の不快を覺え、

遂に自らも天然の法則を犯しつゝありしことを悟るに至るべし。事爰に及びても尙其處行を改めされは、天然は忽彼を責罰すること、嚴格なる教師の悪童を撻つか如くなるべし。何となれば天然は世の心弱き學校教師の如くに、仁慈に傾き過くるやその事なきものなればなり。扱て試に問はん、何故に世の學生は、然かく怠惰不健康なる靜坐の習慣に耽けること此の如く甚たしきや。人は立つことを以て座すること、同様に、若くは更に之よりも一層愉快に考ふことを得べく、殊に今日の如く重大なる書籍も、最も廉價に且つ輕便に出來居る時代に於ては、書籍を手に取りて讀むことを得べく、態々背を曲げ胸を屈するの要あることなけん。去れば眠むげに坐するよりも、却て立て室内を住復しあから、脚本なり詩書なりを讀む方自然にして、且其効果も多かるべし。實際一處に座すと云ふことは、

甚だ懶惰なる習慣にして、是に耽けるは甚だ不可なり。去れど若し座する時、又は座せざるを得ざる時には、必ず光線を背面より受け、胸を充分に突き出して真直ぐに座すべし。又語學を研究する時、又は詩を読む時には成るべく音聲を高くすべし。此習慣はアレキサンドリヤのクレメンヌスも大に懲慙したる所にして、人身の最も要なる機關たる肺臓を強健にし、且つ多くの學校の大抵輕忽に附せし所の民の練習、即ち發音を明晰に聽取るの力を養ふの兩得あるべし。蓋し學生が日夜收得せんと勉むる所の知識と、彼等か兎角陥り易き靜座の習慣とは、十中八九まては何の重要なる關係もなきものなり如何にも彼等の學業には、書冊堆裏に研鑽せざるを得ざるもあるべけれど、例へばホーナーの研究の如きは、一通り文法字句を調べ終りたる後は、ベン、グロリー、チャン山の頂上に於てするも、若し風荒

ニ  
ニ  
ニ

くして山上の讀書に適せざる日には、インヴェラウの老松相交る邊に之をなすも、敢て一室に閉ぢ籠りて之をなすと何の異なる所なかるべし。若し夫れ鬱蒼たる樺樹の邊り、馥郁たる薰風の動く所、若くは洋々たる大河の渚、水聲淙々たる所に於て、或はエスキラスの脚本を繙き、或はプラトリーの著作を閱さは、其快決して室内に於てするに劣ることなきのみならず、却て一層の興味を覺えん。又書籍を一回通讀して難字の索引を作り置かば、二回目よりは字書の力を用ゐずとも、心易く之を読むことを得べし。又健康上より云ふも、趣味の上より云ふも、學生が何處に行きても書籍の臭氣を脱する能はざると、喫煙家の常に煙草の臭氣を離るゝ能はざるが如くなるは甚だ不可なり。而して余は此書籍病の害毒を避んには、義勇兵の軍隊に入りて、兵式の訓練を受くるを以て最良の方法なりと信ず。此

方法は一舉にして學者風の痕跡を拭ひ去り、兼て天下の公民として、強壯なる一箇人として、當に國家に盡くすべき義務の準備をなすことを得ん。近代のプロシヤ人は、古代の希臘人の如くに軍隊教練の必要を知り、皆一定の期間軍事に従事すれども、英國人は早く俗務に奔りて、此練習を怠り、後に公民となるに至りて大に困難を感じざるもの多し。殊に現時の如く汽車汽船の便ありて、案外に少額の費用を以て旅行をなすことを得るの時代に際し、學生たるもの宜しく、或は老樹相交りて緑滴らんとする幽谿の中、若くは白波渚を洗ふ孤島の濱に天然の風光を樂みて、大に健全なる想像を養ふことを勉むべきに、却て終日終月一室に閉居して、書籍に拘束せらるゝ如きは、實に恕すべからざる怠慢と云はざるべからず。若し書籍の必要あらば常に之を懐にするも不可ならざるや論を待たずと雖も、成るべく

は文字の力に依頼せざる所の良習慣を作り、天然界の觀察に依り、直接の研究をなし、四圍の清爽なる自然の感化を受けて、強力の思想と感情の中に、無我無心となり、所謂「善良ある黙從」の状態に入るを以て、更に良好の方法となす。去りながら必ずしも、ウオーズウオースの如き深遠の默想に沈まずとも、先の旅行遠足を試みば、一舉にして健康と修練との二目的を達するとを得ん。殊に地質學、植物學、動物學、其他凡て博物學に屬する諸學は、戶外に於て學ぶを以て最良の法とするものにして、隨て此學に通曉せんとならば必ず常に活潑勇敢なる旅行をなさざるべからず。又歴史古物學の如きも、傳説ある溪谷、荒廢せる寺院、其他邊境の古堂舊閣等に於て研究するを以て、最も適當とする所なり。去れば普天の下卒土の濱、皆多少舟車の便なきはなき此文明の世に生れて、卑弱なる身體を提げ、

碌々として夭折するの外なき憐むべき希望を持して、徒に一室に幽居し、只管讀書の力に依りて學ぶ所の輩は、他の健全なる人々の爲に懦弱にして、取るに取らざるの痴漢として、指笑せらるゝの覺悟なかるべからず。

人苟も身體を強壯敏快にせんとすれば、遊戯及び體操をなすに如かず。世の多くの人の如くに、食前一定の散歩をなすは甚だ良好の習慣なりと雖も、其中には幾分か空虚なる形式に陥り、別に何の興味をも感ぜざるものなきにしもあらず。故に此習慣を五月蠅く思ふ輩は其代りに適宜の遊戯をなさば必要の運動をなすことを得ると同時に健全なる社交上の興味を養ふことを得ん。兒童及び青年にはクリケット適當なるべく静淑、なる人や、沈重にして年輩なる未婚者には、球遊び面白かるべく、其他老幼の差別なくスコットランドの

爽快なるゴルフ遊びは、何人にも宜しからんか。漕艇もオックスフォード、ケンブリッジの如く、屢々過度に陥らざる限りは、無論男らしきが上に純然英國の氣風に適應する運動なり。又セットランド及びヘアリアン海などに於て實習せらるゝ如き、帆具を巧に操縦するの術は、敏活強健なる男子の諸能力を活動せしむる好遊戯たり。魚釣の如きもワルトン、ストツダート及び彼名聲の盛なるジョソウイルソン等の諸實例が一般に證明する如く、默想を凝らし、詩想を練るには甚だ便利なるものなり。又雨天には勿論球撞を以て此上なき遊戯となす。此遊びは能く人の視力、觸感、及び計算の力を敏捷にすること實に驚嘆するに堪へたり。之に比すれば彼骨牌遊の如きは愚拙の極にして、其尤も長處とする所を擧ぐるも、彼ホストが記憶を練るの効ある位に過ぎず。將基の如きは寧ろ學問の類にして、

烈しく脳髓を使用するものにして、遊戯とは呼び難く、精神の秩序なき人には幾分か總括的の効あるべけれども、組織ある思考力を有する人には殆んど何の益をもなさないべし。

(二) 余は彼飲食の事に就て少く論ずる所あらんとす。蓋飲食は甚だ卑近のことなれども、世人却て之を輕視し、其處置宜しきを得るもの少し。故にアペーネシの如きは、常に世界の殺人的二大勢力は過食と煩悶なりと云ひき。去れども此過食の害の如きはスコットランド學生の夭折とは、慥に何の關係もなき所にして、彼等の早世するは、寧ろ食量の過少なるが爲なり。勿論人は第一に食料を有せざるべからず。其次には其食料の實質に富み、滋養の効あるべきことを要す。此事に關する詳細の事情を知らんと欲せば醫師の教を請はざるべからずと云へども、其一般に世に承認せらるゝ事は、即ち尤

も質素なる食品の却て屢々最も効益あること之なり。中にも腦力を輔ひ、血液を富ますには、大燕麥と良好なる肉汁に如くものなきは長き經驗の證明する所なり。故に詩人歌て曰く

強壯なる童子、伶俐なる乙女、

皆此の如くして養はれけり。

縦令ひ滋養の量は充分なりとも、猶之を用ゆるの方法を誤りて種々の害を招くことあり。彼の能く世にある所の生涯奔走を事とし、其行くや歩行すと云はんより競走すと云ふ方適當なるが如き人々は、靜坐して一事に従事すること能はずして、其食事に際しても、出來得る丈の速力を以て一呑みに咽下し去るなり。此の如きは實に方法としても、理論としても、甚だ不可なるものにして、食事の快樂と、消化の効益とを空くするものなり。而して彼繁華雜沓なる都下の實



業家、或は政熱に浮かさるゝ米國人などは、兎角此不養生なる習慣に陥り易く、之と同時に學生其他一段に讀書に耽くる所の人も、亦同様の誘惑を全然避くること能はざるか如し。見よ熱心なる讀書家は一時も早く書を讀まんとして、其食事を生吞するのみならず、時としては且つ讀み且つ食ふに至る。斯くして天然の勢力を同時に別種の二機關——胸と胃——に分派する時は、勢自ら雙方の勢力を衰弱せしめざるを得ざるに至るや必然なり。固より片手にルシアン、アリスヘフアチリス等の輕快なる書籍を持たなから、茶を喫するなどは甚爽にして、且つ有益のことなるへけれども、食事は稍之よりも重要な事柄なれば、全身を之に傾けざるべからず。(チエンセロール、サロロの云へりし如く、*totus in illis* 即ち一時に一物に一身を傾けて)。又出來得へくんば愉快なる談話。若くは輕快なる音樂などを混するは

欠

MISSING

る清水は人をして罪障を犯さしむることなき丈は、確に益効益なり  
はと云はさるを得ず。彼ホイヤストの如き濕氣多き沼地、又はハイ  
ランドの寒氣強き山頂などに於ける効益は兎も角として、常々之を  
用うる時は決して其人は之が爲に美麗になり、又は肥滿するやうの  
ことあるものにあらず。加之す之を全く用ゐざる人は、濠中に轉ひ  
て横死するの憂なく、且つ懷中多少の餘裕を生して、危急に際して  
我一身の困厄を凌ぎ、又は友人の困難を救ふことをも得へきなり。  
(四) 余は密室に籠ると、空氣の流通の惡しきとは、其結果大に人を  
害するものあることを世の學生に告るの大に緊要あるを信ず。夫れ  
不潔の空氣は純潔の血を造る能はず。不潔の血は全身を腐敗せしめ  
ずんば止まず。然れども不潔なる空氣の惡果は直接に感ずると能は  
ざるが故に、思慮なき不注意の人 $\parallel$ 恐らくは多數の人は皆是ならん

|| は自ら毒を吸収するなり。されど其害毒や甚だ隠密の間に浸入するものにして、最も危険なるものなり。故に一室に閉居する所の學生は、其外出する毎に必ず其窓戸を開放すべし。若し又其寢室の窓を開放するも、睡眠者の上に直接に風を吹き込む憂なき限は、必ず夏冬の差別なく、晝夜とも之を開放せよ。少くと清爽なる我蘇國に於ては、感覺の甚だ過敏なる人の外は此方法の大に効益あることを見るべし。尤も夜間の瘴氣の發生するごとき熱國に於ては此限にあらざるや論なし。

(五) 思ふに睡眠に就きても一言するの要ありやと云はれ、人或は之を不要なりとせん。如何にも睡眠の事は自然の儘に任して、睡氣催し來りて寢に就き、雞鳴き東方白くして起出ては充分なるべし。然り若し自然の理なるものか、常に相當の働をなすものならば、其儘

に任して充分なるべしと雖も、其自然の理も人間の爲に種々の方法を以て欺罔せられて、一般に自然に委任するなど云ふことは、屢々漠然たる有名無實の語句たるに過ぎざるに至る、試に此睡眠の一事に於ては、學生たるもの大抵、天然の犯則者なるのみならず。彼等の學業其ものも、安息を害する所の犯罪なり。去れば最も嚴格なる豫防法を設けて、思索を事とする人をして、神聖にして犯すべからざる安眠の領域を犯さしめざる様つとめざるべからず。概して精神を興奮せしむるは、濃き珈琲を喫せると一般、直接に眠を妨ぐるのなれば、學生は其日常の課程を定るに當り、烈しく精神を刺撃興奮する所の學課と、就床時間とを直接に連続せしめざる様になし、成るべく一日最終の勉強をば、比較的に輕易なるもの、若くは興味薄くして睡を促がすが如きものならしむるを良とす。而して就床前一

時間位散歩をなし、或は朋輩と快愉に雑談せば更に妙ならん。斯くすれば何の無理もなく、自然の儘に適度の睡眠をなすことを得べし。去れと何時間睡眠するを以て適度とするやの問題に關しては、精密なる規則を設くる能はず。去れど兎に角一般の經驗に照らして、六時間より短き、若くは八時間より長き睡眠は、共に法外と云はざるべからず。思ふに毎日少くとも二時間散歩をなし、外に八九時間勉強する人は、自ら睡眠不足より生ずる發熱疲憊を避くるに充分なる適宜の睡眠時間を直に發見することを得べし。蓋し早起の習慣は、古來諸大人物の傳記に著るしく見ゆる所なるが、余に取りては此一事は到底自ら實行する能はざる所なるを以て敢て多言せざるべし。去りながら何は兎もあれ、若し容易に且自然に之を實行することを得んには、其甚だ健全なる好習慣たるや疑ふべくもあらず。就中彼

有名なるパロンアンセンの如く、劇務の爲に精神を勞すること多き地位に立つ人には、勉強深思の時間とすべきは只早朝の數時間あるのみなるは明瞭なる事實なり。

(六) 衛生法としての水浴の効用に就ては、著者は屢々處々の有名なる水浴病院を實見し、深く其原理と技術とを考察したるを以て、自ら確信して論斷することを得。抑も水浴療法なる名は、實際其効果を表明すること甚だ不充分なり。蓋此法は皮膚自然の發汗作用を刺撃せんが爲に、種々の方法を以て、運動、閑暇、食事、娛樂、交際、及び水浴等を精密に計算したる上、程よく結合したるものなり。斯る療法の身體に及ぼす結果の大に良好なるべきは見易きの道理にして、學生が殊に注目すべきは、諸名醫の監視の下に、多額の費用を以て始めて受くることを得べき此療法も、其一部分は何の危険も

なく、何の費用もなく、日常實行することを得べきこと之なり。即ち水に乏しからざる地方にては、虚弱の人にあらざる限は、毎朝の水浴は元氣を増すの効あるべきなり。若し又水に乏しき地方にては、水に浸してよく絞れる綿布などをを用うるも其効に於て何の異なることもなかるべし。浴中は必ず身體を包みて、其綿布にて充分皮膚を摩擦すべし。然る後乾ける布片を以て再び之を摩擦せば、皮膚は赤色を呈すべし。之れ即ち我國の如き氣候の一定せざる北地に於て能く行はれ、能く人を苦むる所の皮膚の作用に關する諸病を豫防する最良の方法なり。水浴諸療法中最も評判のある濕滯せる綿布を以て全身を包むの法は、實際上全身に緩和なる發胞を施せると同一にして、能く是等の事に熟せる人の指揮に従て、或特種の目的の爲に實行することを得べし。然れども此法も他の水浴諸法と等しく、其身

體の反動力の強弱によりて利ともなり、害ともなるものにして、健全なる運動及び日光風露の鍛鍊を経たる強壯の青年は、必ず充分の反動力を有するものなり。去れど性柔弱遲緩なる人は、相應の用心をなし、己よりも經驗に富める人の指揮をも受けずして、急に以上の如き療法を試むるは極めて危険のことなれば、深く注意すべきこととす。

七) 余が衛生に關して更に云はんとする處のものは、以上と全く其趣きを異にするものなり。思ふに人は只其胃腑にのみ注意したりとて、決して健全なることを得るものにあらず。夫れ構造の紛錯極りなき五臟六腑を支持する所の肉躰は、又精神を扶持する所のものなりと雖も、其精神も亦肉躰全機關の動力たる其有様、恰も蒸氣力の蒸氣機關に於けるが如きものなれば、若し之を制御整調する所の力

を欠かんか、忽ち不調和の暴脹を來し、立所に巧妙なるの肉躰の諸機關を粉碎し、盡くすに至る。故に身體の諸機關は、皆修練ある意思の習慣的制御を受くること強からざれば、決して其運轉を安全に持續し得るものにあらず。一般に人間の肉力は、フラットが帝心 *Stylos vois* とまで崇重せし所の精神の鹽制を脱する時は、忽ち狂熱の有様に陥り、支離滅裂の状態に歸せんとするの強き傾向を有するものとす。去れば緩急其度を得たる感情の府樂は、肉躰諸機關の琴線に觸れて、其調和を傳ふるものにして、隨て心か氣隨氣儘の忍ばしき状態に陥らざる限りは、吾人の心臓は自から其活力を早衰せしむるか如き猛烈亂調なる鼓動をなさざるべし。故に若し身躰の健康を欲せば、必ず先づ其心を善良にせざるべからず。若し心の善良ならんことを欲せば、其智を聰明にせざるべからず。而して智の聰明な

らんことを欲せば、信仰と敬虔の念とを養はざるべからず。何となれば神明を恐るゝは、智の始なればなり、而して此神明を恐るゝとは何の意義なるやは、余か次章に於て論究せんと欲する所なり。

## 德育論

(二) 今や余は本書中最も緊要なる德育を論ずるの章に達せり。思ふに道念なるものは、人に動機と整理の力を附與するものなれば、實際上全身の治者主君にして、又正當の主人公たるなり。故に高尚なる道念は、偉大なる人物に欠くべからざる要素と云はざるを得ず。去れば其人の才力如何に燦爛として、敏達英邁且宏大なりとも、若し善の一事を欠かんには、其人は畢竟賤むべき一匹夫のみ。縦しや其功業赫々として尊榮を極むとも、其尊榮は眞の尊榮にあらずして、唯これ光輝ある一の罪惡のみ。彼一時歐州の天地を震動せしめたる奈翁一世の如きは、人間にして人間以上の力を奮ひたる大人傑なれども、其實は眞正なる人間的偉大を欠けるものと云はざるを得ず。



思ふに彼は吾人が通常悪人と呼ぶ所のものは、稍其趣を異にすとも、只管志を征戦と功名に奇せ、隨て無私にして始めて達するを得べき最も高尚なる道義を行ふの機會を有せざりしが故に、彼の事業は如何に偉大なりとも、道德上の人物として終生賤少なる匹夫に過ぎざりき。而して此道德的要素の缺乏より、真正に偉大なること能はざるものは、獨り是等征服者政事家のみに限らず。ハートレー氏曰く『如何なるものも容易に科學數學博物學の大家、及び甚だしきは神學の大家の虚名心、自負心、驕傲心、競争心、嫉妬心に勝つこと能はむ』と云はれたるは、其實際上を示すものにして、少しも驚くべきことにあらず。思ふに道念の高尚ならんことを欲せば、其他の能力の如くに特別の修練を之に與へざるべからず。而して吾人の感情たるや、其天性風の如くにして、甚だ處理し難きものなる

が上に、吾人の行動は皆此感情の結果に外ならざるが故に、道德上偉大の人物となるは眞に容易の業ならず。去れば道德の最高點に達せんとするは實に至難の業にして、隨て之に達するは人倫の最大事業と云はざるを得ず。若し夫れペイロンの大詩人となれるが如きは、只是天才のまにまに爰に到れるものにして、彼の身に取りては易々たる事なりしなり。彼は詩界の鷲なり、飛揚せざらんとするも飛揚せざるを得ざるなり。去れども其放恣なる天性を制し、其勃々たる不平を慰め、合理的の人間として、正當なる紳士として、生活することとは彼の一大難事にして、彼も亦自ら深く之を願はざりしものゝ如し。故に彼の生涯は其大なる天才と、崇高なる詩趣とを持ちながら、概して一大失敗の活歴史にして、大に後進の人の見て以て戒とすべき所なり。今一つ天才の人と雖も道念の修練足らざる時は、之

に觸れて屢一身の覆没を來すに至る所の暗礁上に立ちて、後人の戒をなす所の燈臺とも云ふべきは、ワオルター、サヴェーシ、ランドアなり。彼れ巧に文を屬し、英文學界には比類少きほどの人物なりしに、其精巧なる文章も、銳利なる思想も、絶て其効なく、徒に傲慢邪僻にして、常に殆んど狂亂の人の如くなりき。故に苟も生活の航路中に自から難破せざらんことを希ふものは、先づ第一に眞面目の心を以て『欠くべからざる一物あり』なる經句を心裡に銘せざるべからず。『一物』とは何ぞや。金錢必ずしも必要ならず。權勢必ずしも必要ならず。敏才必ずしも必要ならず。名譽必ずしも必要ならず。自由必ずしも必要ならず。健康と雖も亦必ずしも必要ならず。獨り品性——完全に練磨せられたる意思——のみは吾人を濟度し得る所の唯一必要品なり。若し吾人にして其濟度を受けざらんか、必ず永劫の苦

厄を受くべきなり。而して此品性に關しては如何なる人と雖も、『吾品性は昇進することはなくとも、決して下降するの恐なし』など、油斷をすべき餘地はあらず。若し斯る油斷をなす人あらば、其人の品性は忽ち下降すべきこと疑を容れず。之を要するに人の道念は之を其儘に放置する時は、他の勢力と同じく漸々勢力消磨し去りて、其分量自ら減少するものあれば、吾人は大に覺悟する所ありて、男らしく一生を了するの決心なかるべからず。吾人は實に天の恩恵により再び受けがたき人身を受くるの榮を得たるもの、豈高尚なる生活を遂げんことを期せずして可ならんや。

(二) 余は德育に關する詳細の論に入るに先て、一言にして云へば道徳と信仰の關係とも云ふべきものを論ずるを以て良策なりと信ず、蓋し此關係は隨分世人に誤解せらるゝ所に於て、セレミ、マンザム

以下、英國道德家の或一派の如きは、全く宗教と縁を絶ちて道德を經營せんと勉めたり。然れども此の如きは甚だ無理なる離縁にして、且彼等の精神の極めて狹隘に且つ不完全なるを示すものと云はざるを得ず。固より彼の希臘のエピキュラスの如き哲學者は、此崇嚴なる宇宙の數理的組織を以て、只原子の偶然に盲動するより生ずるものなりと斷じたりし人なりしか、彼れと雖も先づ通俗に所謂善人たりしあるべく、其日常の舉動も清淨潔白なりしならん。而して今の時代にありても天然の理法とか、不變の因果とか、自然淘汰とか、好境遇とか、外界事情の幸福なる連關とか、其他凡て主觀を離れて此宇宙の組織を説明し盡くすに足る如き不道理なる理窟を喋々する人は、尤も有徳の人の部類に屬すべけれども、斯かる道德は眞に健全なる人情を有する人には甚だ慊らぬ心地せらるべく、否實に無稽

にして奇快なる様に見ゆべし。例へは一國の臣民たるものが自ら能く國家の課税に應じ、相當の年月間兵士となりて國を護るとも、其國君の通過を見ながら帽子を取らざるが如き舉動あらば、吾人は忽ち不忠義の徒として之を指彈すべく、然らざれば粗野禮を知らず、徒に空想に驅らるゝ痴漢として之を撥斥すべし。無神論者の如きも、其空想的のものと、實行的のものと何れを問はず、皆此類の人にして、空想迷執、己が首を縊らんとて絹を紡ぐものに過ぎず。結局これ高尚なる感應を欠きたる推理器械にして、其陰鬱なる精神は、熱もなもなく光なく、我小智識を負ふて全心を涸らし、只々自ら觸接することを得るもの、分類することを得るもの、統計し得るもの、解剖し得るもの、外は、一切感ぜぬ所の憐むべき勤物のみ。去りながら爰に一物あり、此物たる凡ての觸感の上に立ち、凡ての顯微鏡も

之を見るの力なく、凡ての奇怪なる判断も之を分別するに由なきものにして、其名を單に生命と云ふ。生命とは活動的道<sup>○</sup>聖<sup>○</sup>にして神の別名に外ならず。抑も此無上の事實を無視するは、ワットの智なくして蒸氣機關を案出せんとするが如く、泉源を示さずして一大市府の爲に水道の圖面を造らんとするが如し。是豈萬事萬物の依て以て生ずる根本的の事實を忘れ、頭なき肢體を造らんとするものにあらずや。故に青年たるものは、決して此冷淡なる反動的道德主義を以て満足すること勿れ。此は只物質的の歸納によりて義務なるものを算出せんとする卑劣なる一主義のみ。凡て更に高尚なる道德の泉源は、決して此の如く淺薄なるものにあらず、皆衷心より湧出する所の道德的感應にして、之を供給するものは神其者に外ならざるなり。

(三) 己れが貴重なる生涯を、最も高尚に過さんと希ふ所のもの、須

らく守るべき二三の美德を特論せんに、凡そ如何なる時にも、如何なる場合にも、皆常に夫れられに自然の需用あるものにして、人が之に應ずると、否とによりて人生勝敗の機は自ら決すべし。櫻草の生ずるは春のみに限る。美德にも猶此の如きものあり。青年にして其強勁なる萌芽を生ぜずんば、身を終るまで其繁茂を見ることがなかるべし。

(四) 是等の美德の第一は服従なり。思ふに自由なる語は實に近頃の大流行にして、疑もなくそは甚だ善事にして、凡そ健全なる人々の大に尊重すべき所なれども、吾人若し深く其意義を了知せされば、其害將に計られざらんとす。抑も自由とは、凡ての人は其天然の活動をなすに當り、習俗的人工的にして、而かも苦痛なる約束を受くることなきの意にして、此の如きは純然たる善事なるに相違なきも、

自由と云ふことのみにては深く人事に立入りたることにあらず。只これ人生行動の發起點に過ぎざるのみ。換言すれば人に其活劇の舞臺を與ふるのみにして、其動作の體裁を示すものにあらず。故に此緊要なる發起點以外の動作は、是皆自由の範圍を出で、却て制限の部類に入るものなり。凡そ總ての規律は制限に外ならずして、畢竟規律とは合理的にせられたる存在の別名のみ。而して社會の規律あるものは、人民が自ら好みて作れるものにあらずして、寧ろ多くは社會全體の幸福の爲に定められたるものなるが故に、何人に限らず社會の一員たらんとするものは、第一に服従の義務を知らざるべからず。法律、軍事、宗教、政治の社會は此原理を實現せるものに外ならず。去れども勿論各個人は皆一個人たる範圍内に於て自由を有するものにして、若し之を失はんには其身は單純なる器械となり

て、人格を放棄したるものと云はざるべからず。然かもその一旦社會の一員として働く時は、斷じて全社會を一致團結せしむる所の制限に従はざるを得ず。故に人たとび社會最高の地位に登るも、其地位は却て彼をして最も多く此制限に服従せざるを得ざらしむるものなり。見よ彼至尊至榮の羅馬法王は自ら奴隸と稱するにあらずや。之を譬ふれば人身最高の位地にある頭腦と雖も、有機全般の理法に背く能はざること、最低の位地にある足と何の異なることなきが如し。故に各人が忠實に社會の制限に服従するは、これ社會に對する義務なると同時に社會安寧の擔保たり。使徒ポールの獨得の活氣と、熱心と、慧眼とを以て之を崇巖に説明したり。故に若し諸子が社會組織に對する自己の職務を厭ふの念起り、最早其羈絆に堪へざる如きことあらば、謹で格林多前書十二章、廿四節—三十一節を讀め。實

に人が我意に任せて不規律に行動するが如きは、これ板壁に罅隙の出来たるが如きものにして、若し之を放擲し置く時は、漸々大なる罅隙となりて、果ては全然粉碎せざるは止まざるべし。羅馬の史家は、彼カエサルスの勇將ハンニバルが、能く人を指揮すると共に、又能く人に服従することを知りしは、彼が顯著なる長所ありしことを記して曰く、『指揮及服従と云へる全然相反せる事を、一人にして能く兼ね備ふると、彼に優る者は未だ嘗て之あらざるなり』如何にも指揮と服従とは兩々相反するものなるべしと雖も、深く之を研究するに、服従は此上なき指揮の好練習なり。其故は人若し指揮することのみ知るときは、凡ての権利行用に必要なる権利の制限を覺らずして、隨て好く権利を行使すること能はざるべしと雖も、自ら服従の身となるに及んで始めて之を知ることを得へければなり。故

に青年をして特に社會的あると同時に、青年時代に最も相應したる美德として、古の羅馬人の如き服従心を養はしめよ。上位の人の命令は、何の理窟を要せず、上位の人の命令なるが故に之を奉行すべし。而して殊に嚴正に之を奉行せざるべからず。後進の人若し先輩の信用を得んとせば、精密に、嚴正に事務を取るに如かず。是固より怪むに足らざることにして、凡て何事に依らず、其機關全體が面白く愉快に運轉するは、個人が各其能を盡くして少しも誤まらざるに依る。實に此錯雜なる社會の事業に於ては、如何なる天才ありとも、如何ある手腕ありとも、其間に服従の行はれざる時は成行くものにあらず。若し夫れ時計にして遅速一定せざらんには如何にして時間を知るべき。若し人が他人の事業の爲に働きて其欠ぐべからざる要素となる時は、事業家は已が時計の如くに其人に依頼するに至

るべし。故に組合事業に關する人は「此人は常に能く命ぜられたる事務を勉め、出席すべき時間には必ず出席する人なり」と云はるゝほど名譽なることなし。

五) 次に青年が特別に養成すべきは誠實の心にして、余は實にプラットと同じく、虚言を以て神人共に憎む所なりとするものなり。青年は天性誠實なるものなれども、長ずるに従ひ恐怖虚榮の心、其他我身に關する感化又は利害などの爲に、遂に此良性を壓倒せられ、虚偽の小人となること多し。ジョン、スチユワート、ミルは、政治を論せる一小冊子に、英國の勞働社會は殆んど皆虚言者なりと云へりしが、又彼は歐州中潜に已の卑劣を恥づる所の唯一の勞働社會は、我英國の勞働社會のみとの讚辭を呈せり。思ふに青年たるもの初めて社會に出づる時は、能く己れの世界は嚴正なる實際世界にして、

此處には虚偽虚飾は永久の實功を收むる能はざるものなることを深く心に印象せざるべからず。故に社會に入るには、必ず人に實力以上に見られんことを勉めずして、却て外見よりも大なる實力を蓄ふる様注意せざるべからず。何人に限らず實力に伴はざる外見を張らんと勉むる人は、畢竟虚偽を働く人にして、一時は以て難局を凌ぐ事あるやも計られずと雖、遂には鍍金せる銅の如く、時來れば地金を露はさるを得ず。即ち是れ純金の披裂消磨に遇ふも、少しも變ぜざるに及ばざる所以なり。而して世の商人が此類の社交的虚偽を働くは、重に利を愛するの心より起るものなれども、青年諸子の虚偽は重に怠惰、虚誇、臆病の三者より來るが故に、青年輩は先づ特別の用心を凝らして、是等の敵に備へざるべからず。概して怠惰なる人は、入用の時迄に要品を具へ付け置かずして、事急なる時に偽

品を示して一時を瞞着せんとするものにして、一例を擧ぐれば、學校兒童が譯讀を命ぜられたる時、潜に側の反譯文を朗讀するが如き是あり。抑も此場合に於て、教師の知らんと要する所は生徒の腦中にある所のものなり。然るを生徒は腦中よりせずして、却て之を紙上より讀む。是れ虚偽にあらざして何ぞや。獨り是のみならず、凡て輕浮、淺薄、虚飾等のものは事實上虚偽に外ならずして、人の當に恥づべき所のものとす。虚誇心も虚偽を呼起す所の刺激物なるが、一般に學薄く經驗少き青年は、人に善く見られんと思ふ心よりして、屢實際自ら知らぬを知るやうに申立て、人をして我價值を實際よりも高く取らしめんとて、些少の智識を多く見せ掛くるの惡習に陥るとあるものなり。故に人は成るべく知らざるを知らずとするが善し。されば長き間には我身の利益となるべきなり。若し然らずして巧に

我不學を隠す時は、遂に一の習癖となり、一生之を脱する能はざることあるべし。然れども青年の士にして勇氣欠如たらんか、後日之が爲め苦厄を感ずること、虚誇の心によりて苦厄を受くるよりも更に甚だしきものあらん。抑も虚傲なるものは青年の士には有勝の事にして、後には漸く消散すべく、且つ社會全體は一致して其個人の自負心を打破せんとしつゝあるものなれば、少しく謙遜卑下するは常に安全なれども、青年の際より我思想を吐露することを恐懼するが如きあらば、果ては思のままに思考することをさへ疑懼躊躇するに至らん。蓋し最も男らしき道德上の勇氣は疑もなく社會的徳義の最も高尚なるものあり。世に最も尊崇せらるゝ所の傳説、社會の組織は道德上の勇氣を阻格せしむること多きものにして、又彼情味濃なる愛情の如きも又此弊あるものなれば、人は斷乎たる決心と、巧



緻なる手練とを有せざるべからず。然れども此兩者を兼有することは人の皆能くする所にあらず。又之に反して己が知り得たる所の事實を悉く話し盡すも甚だ喜ぶべきことにあらず。思ふに事實が或る重大ある社會の利害連想及び感情と相矛盾せる時ほど、人の惡感を惹き起すものはあらず。固より時に依りては人に惡感をも與へざるべからざることもあるべしと雖も、之決して好みて求むべきことにあらず。『蛇の如く智かれ鶴の如く温良かれ』と云ふ經句は、よく此事に適應せる格言なり。然れども人は時によりては上長の怒を招きても、云ふべきことは云はざるべからざる場合なきにあらず。云ふべきことを云はざるは是れ臆病未練のみ。たとひ同様に臆病なる幾千百の子分を控ゆるとも、其卑怯たるに於て何の異なることあらんや。

(六) 『怠慢なる勿れ』とは余が青年諸子に與へ得る最上の忠告なり。これ元より別段意志に一の動力をも附與することなき消極的の教訓にして、概して消極的の訓戒は惡魔の没入を強硬的に拒ぐの力に乏しき様に見ゆれども、善良なる精神を養ふには其効果必ずしも僅少ならざるべし。人が自ら嚴酷なる法規によりて我舉止を拘束するは甚だ不可なることにして、此の如き形式主義は心の狹隘なるより起因するものにして、其結果も亦更に精神を狹隘にするに止まるべし。去れども幼年の時より時間を經濟的に使用するの習慣を始むること最も必要にして、此習慣はよく秩序系統を立つるに依りて始めて得らるべし。若し青年にして毎日一定時間を一定事業に使用する時は、決して深く惡習に染むことあかるべし。勿論其時間の長短の如きは其人の事情に依りて定まるべしと雖も、必ず其時間内は一定の事業

を續くること必要なり。實に毎日一時間づゝを一物の勉強に消費する時は、草木の種の如く一年の終には大なる生長を見るべし。何の規律もなく種々の學課を手當次第に讀み散らすが如き勉強は、其精神上に何の良効もなきこと殆んど怠惰の如くなりと云ふも過言にあらず、怠惰者は戸口を開放して盜賊の侵入を促がす所の留守番の如し。故に若し人にして自ら『吾は無益の事をなすの暇なく、不條理の放恣をなすの要なく、卑しき快樂を催がす所の刺撃を要せず、只變化ある日常の業務こそ吾最大の快樂にして、其日の業務の終りたる時に、明日更に新なる精力を以て事を取らんと安心しつゝ、休息するは、此上なく心地よきことなり』と公言したる時ほど安全なるはあらず。去れば人生の洵に眞面目なるものたることを確信して、事を始るは怠惰を拒く最良の防腐劑と云はざるべからず。人は此人生

に就て種々の臆説を逞ふすれども、兎に角此世界は決して假そめなる舞臺にあらず、實に萬物皆夫れぞれに働きをなすの世界なれば、此間に獨り怠惰に日を送るは實に覆沒破滅の基と云を憚からず。聞かずや『人の命は短くして其事業や限りなし、夫れ事をなすの機會は甚だ去り易くして人間の實驗は誤解に陥り易し、難い哉人人間適當の判斷を得ることや』とは賢明あるヒポクラースが教へたる醫箴劈頭の格言なり。是は耶蘇紀元前五百餘年頃既に濟生の仁術たる醫學の羅針盤たりしものなるが、二千餘年後の今日も尙社會に活動の指針として無上の効力あるものなり。

(七) 吾人若し眼を開て何故に世の最も善良なる主旨を有せる諸事業の、中途にして力足らずして空く廢するの多きかを觀來れば、一般に其人物の狹量なるより來るものなることを知るへし。人如何に高尚

なる事業を企つるも、他人若し之に同情なき時は人誰か之を贊助するものあらんや。世には随分暇の如く己れの職業的宗教的政治的若くは文學的の甲殻中に蟄居して、小心翼翼々決して危嶮なしと分かり切りたる區域内を匍ひ廻り、其外には少しも心を傾けざる人あり。吾人若し斯る人の如何に頼もしからぬ狹隘なる生活をなしつゝあるかを見れば吾人自ら如何にせば更に濶大高尚なる社會生活を遂げ得べきかを知るべし。詩人にして又哲學者たるゲーテは年積りて八十となり、病で將に瞑目せんとする刹那に、苦しき息の下より『より多くの光を！』と呼へりとかや。今の青年たるもの、若し職業其他の狹隘なる甲殻を脱せんと願はば、日々『より多くの愛を！』と呼ぶべし。世には才智ある人はあれども、才を用ゆるの法を知るものなく、劍に巧あるものあれども、之を用るにその處を得ずして、或

は悪事の爲に之を揮ふものあり。此の如き人間は必ず愛なるものを知ることを要す。彼大使徒教へて曰く『汝泣く所のもど共に泣き喜ぶものと共に喜べ』と。若し此格言を布衍して之を身に行はば、一般の同情に富むこと恰もセクスピアの想像に富めるか如くあるに至らん。勿論人は皆詩人となること能はずと雖も、何人も作詩及び詩興の基礎たる深功温雅ある感情を養成するを得べし。思ふに社會にありても個人にありても詩的生活をなすは、詩其ものを作るよりも善事にして、此種の生活は單調と私慾とに反して、凡ての方面より熱心に善なるもの、美なるものを取り、以て自ら養ふ所のものなり。故に青年たるもの第一に偏狹なる同情の區域内に蟄居し、憎惡の心と偏執の氣を養ふが如きことなきやう注意せざるべからず。勿論正當に人を憎む者は、屢冷淡に人に交るものよりも却て善良な

ることあれども、是とても始めより全く人を憎まざるの勝れるに如かず。善人は成るべく自己と云ふことを去りて、却て己れと自ら反對なる人物又は社會の長處を擇ばんことを努むべきなり。近世功利主義の領袖たるミル氏が、狹隘にして冷淡なる學説を有しかがら、コレリツヂ及びトーマス、カライルの如き反對の人々を容るゝの雅量ありしは、實に賞讃すべき事實と云はざるを得ず。蓋し人類は皆同胞なるが故に、他人の社會及び團體を嘲弄攻撃するは甚だ不可なり。實に一言にして他を罵倒し去るは一見甚だ雄壯に見ゆれども、其實極めて小供らしきものなれば、青年諸子は世界の人が擧て誹謗する所の人を見るも、又其人が世人の皆輕蔑する所の宗派團體等に屬することありども、決して心に之を容るゝに吝なる勿れ。古來多くの義人は一般の社會に阻はれたり。故に世間に罵詈せらるゝ人は

殊に諸子より親切なる評價を受くるの要ありと云ふべし。『凡ての人を敬へよ』とは新約全書に見ゆる數多の神聖にして賢明なる金言の一なり。而して人能く此の如くならんと欲せば凡ての人を知らざるべからず。而して之を知るには兄弟の如き交情を以て其人の最も長ずる處を看破せざるべからず。蓋人を知るは即ち真正の道徳哲學にして、取りも直さず人間至高の富たり。故に一旦之を知り得たる後も益之を研鑽する時は、遂に善良なる經世家として天下萬民の愛の中に、善良の社會を構成し得べく、我身の言行も自ら極めて純潔となるべきなり。

(八) 今日青年中には何人の目にも、自負自尊如何なるものをも輕視すると云ふ風の明かに見ゆるものあり。此の如きは實に可愛げなき若輩にして、若し此弊風が只一時若氣の虚飾にあらずして、成年

の後まで繼續するものならんには、彼等の前途こそ望なきものなれ。プラトリーの曰く『敬異の心は眞正の哲學的感情なり』と。實に然り、人清透の眼識と敬虔の情と共に、此敬異の心を有するは、實にその人の美事にして、殊に青年が社會の門出をなせる當初に此心に富めるは最も自然にして、且健全なる順序と云はざるべからず。而して青年が此心に欠乏せるものあるは、全く其無感覺、不頓着、及び私慾慢心を示すものゝみ。此の如き人は淺見者流の目には敏捷なる様に見ゆることあれど是れ極めて輕薄なる虛才にして取るに足らず。故に青年の諸子は是等の不自然にして虛傲なる性癖を去り、大に敬虔の念を養成せざるべからず。諸子は、萬事平民的の事を好む今の世の中に生れたれば、此心の功德を多く認めざるべしと雖も、是れ最も人の精神を健全ならしむるものあり。詩人歌ふて曰く

『吾人は羨美、希望、及び愛に依りて生活す』。

思ふに最大の人物と雖も其實甚だ小弱なる動物に過ぎずして、幾分か他に立勝りたる所あるは全く此宇宙の偉大を分領するに依るのみ。約翰書に明晰に此理を説明して曰く、『愛するものよ、吾等今神の子たり、後如何未だ現れず、其現はれし時には神に似んことを知る、そは吾等其眞の様を見るべければあり』と。其意は完全なる善美の模型を見るに羨美敬服の情を以てするは、自から其善美と同化する手段なりと云ふにあり。即ち健全純潔なる人は物を見て之を羨美し而して自ら羨美する所のものを模倣す。ストイツク學者が人生の重なる目的は宇宙を觀察して之に模倣するにありと云はれたるは、實に其思想高雅、其文字明晰ありと云ふべし。然れども若し人始より物を羨美するの情なくんば、如何でか物を見ることあるべき。而

して其見ざるものを摸倣するは到底亦し得ざる所にあらざや。且つ其真正の羨美は鋭敏なる看破力と高尚なる感情の結果にして、他人を侮り他物を輕蔑するの習慣の如きは、此其看破力を盲にし、更に高尚なる感情を消滅せしむるものなり。

(九) 夫れ道德には感應の原理と制調の原理とありて、前に論じたる愛と云ひ敬と云ふは前者に屬するものにして、余の是より將に論ぜんとする所の節制の如きは、後者の部に入るべきものなり。蓋し此節制に就ては、世の青年多く何の思慮もなく。世人も深く彼等の節制を咎めざるが如しと雖、其實是は甚だ大切なるものにして、青年諸子若し醫家の所謂豫防方法を知り節制の必要を悟らざれば、必らずや自ら危險の境崖に陥り、遠からずして實驗上より之を悟らざるを得ざるに至らん。蓋し凡ての過度を避けよなど云ふ忠告は血氣の

青年輩には眞に無價値にして、聞くも不愉快なるやうに思はるべしと雖も、是れ青年血氣の諸子は硝煙彈雨の中に蔭入することを知らざるが爲なり。未だ用心の必要なること勇氣にも劣らぬものなることを知らざるが爲なり。彼アリストートルは尤も冷靜にして實踐的ある思索家にして、精緻博通の智識を有し、其論ずる所常に深遠にして正鵠を失ふること稀なる大學者なるが、自ら謂へらく、人生の行路難しと雖も其進行に最も緊要なる規則即ち德行は、過大ならず過小ならず、常に其中庸を得るにありと。故に漸く人生の行路に取掛れる青年の人は、其始め如何に自ら大言壯語を好み、激越の感情を喜び、萬事外見の華奢なることを愛するとも、其漸く成長するに隨て次第々々に節制の度も成長し、兼て最大の勇者とは物に耽らずして却て能く己れを制する人なることを承認するに至らんこと必せり。彼の

放逸なる品行の後に、所謂形容枯槁、顔色憔悴の有様を來すが如きは、即ち天然の法則を犯して其刑罰を受けたるものにして、凡て放逸過度の品行は自殺の發端なり。又之れを早晚家屋の基礎を覆へず所の地下の暗流にも譬へつべし。學問に於ても亦然り。長時間激烈に精神を勞するは大に腦力を疲らし、胃の働を亂し、全身の活動を無力不活潑ならしむ、殊に彼所謂注入主義の勉學の如きは其殊に甚だしきものなり。去れば物は其甚だしきに過ぎる中に豫め警戒せざるべからず。急激の動作は必ず急激の結果を生ずるものにして、一度罅裂を得たる器物は一時巧に編織し得べしと云へども、決して完全無缺の器物の如く荒き使用には堪ゆること能はざらん。知識は固より善事なりと雖も、間斷なく之を求めんとするは善事にあらず。語に曰く『餘り賢明なるなかれ。如何なれば汝は時至らざるに先づ

夭折せんとするや』と。此語を發せる其人の誰なるかを思へ。

(十) 彼明敏にして頓才あるシドネースミスが、英國は貧困を以て罪惡とあす所の唯一の邦國なりと云ひしが如くに、英國は果して世界一の富國なること争ふべからずとするも、此邦の青年たるものが社會の初陣をなさんとするに當りては、先づ人間の眞威嚴は其所有する所の多きに在らずして、只其人にありてふ眞理を心に銘すること最も要用なり。知らずや、天國は汝の内にありて外に存せざること。去れば凡ての商工業社會に多少存せざるなき道德上の害毒、即ち人を評價するに其精神の内的品格を以てせずして、却て其生活の外装を以てせんとするの惡習に感染せざる様注意せよ。見よ、彼侏儒と雖も高臺に上れば衆人を下瞰することを得るは、只是れ其位置の然らしむる所のみ。彼富の外に何の價值もなき素封家亦此の如し。

彼等は金の力に依りて社會の有力なる地位を占め、中には國會議員などの肩書を得るもあれど、若し彼等をして人爲的高地位を下らしめ、直接に其人の素顔を見んか、吾人は忽ち彼等の共に語るに足らざる一匹夫たるを知らん。故に青年諸子は先づ社會に、富に依頼する所の富者程、片腹痛きもの稀なることを忘るべからず。而して其外部の富有に斯の如き高價值ありと思ふ其卑屈心は、直に人の眞正の品法を暗まし、人間價値の標準を顛倒せしむるものあり。勿論衣食の料を辨じ、又出來得べくんば消化を助くる爲に一杯の葡萄酒を快く傾くるを得る位の金錢を持たざるべからざるは云ふまでもなきことなれども、只身代を造ることのみ熱心するは固より甚だ不可なることにして、ソクラテス、プラトニー、アリストートル及び使徒ポールの徒、皆金錢を蓄積する事は人の品性を損し、財貨に最大

の價値を置くものは我身に最小の價値を置くものなることを眞面目に論破せざるなし。去れば青年諸子は皆固く我道德及び智識を基礎として立たざるべからず。さすれば長日月の中には眞の價値自ら現はれて、如何なる王侯も、如何なる富豪も、我身の上流に立つことを得るもの一人として存せざることを見るに至らん。

(十一) 余は諸種の徳を一々列記せんとするものにあらず、若し道德の目錄を望まばアリストートルを讀むべし。去れど爰に偉大なる道徳行爲に欠ぐべからざる要素にして、凡ての成効の確實なる擔保とも云ふべき品性上の一美德あり、これ即ち忍耐にして余の一言なきを得ざる所のものなり。余は己れの成すべき一事業を有しながら、之に固着することを知らざる人が、此世界に於て何の効益あるかを見る能はず。詩人テリツワオースは其詩エキスカリシヨンに於て、自



ら縦令ひ天色曇ることあるも、平生の如く山間を逍遙する所以を記して曰く、微雨の少しく肌に快からざるあるも、些細の事情の爲に一旦定めたる目的を捨つるは、自己の品性を害するの虞あるが爲なりと。實に名言と云はざるを得ず。吾人の世界は斷じて些事の爲に阻喪すべき所にあらず。人世の行路固より多くの困難ありと雖も、之と戦ふは即ち吾人の生活にして、之を征服するは即ち高尚なる生活を送ぐるなり。余の一友クロシヤンの山に登り、踏め絶頂ならんと思ひし所に至り見れば、眞の絶頂は更に西方二哩の彼方にありて、之に達すへき路は巖石重疊して、己に疲れ果てたる身の容易に越し得べしとも見えず、加るに山頂は烟霧に掩はれ、日没は一時間以内に通りければ、止むを得ず捷路を辿りて山を下れり。彼れ謂らく若し此儘に終らんには、生涯を思ひ起すごとに、必らず我失敗挫

折をも聯想せざるべからず、是は實に自ら忍ぶ能はざる所なりと、翌日再び登山して遂に其絶頂に達し、目出度此處に行厨を喫したりと云ふ。斯る氣概の人は何事にも成效すべきは疑なし。故に一人たゞ困難に遭遇するとも決して逡巡することなかれ、殊に事業創始の際に獨乙の諺にも『凡ての手始は困難なり』とあるが如くに、萬事蹉跌し易きものなれば、此心得最も必要なり。加之ず、概して事業は高尚なるに隨ひ其困難も大なるものなれども、其實は吾人の以て行ふの價值ある事業は獨り其困難なる事業にして、之を成效するには必ずや確乎たる意思と、強勁なる手腕を要す。凡て活動の世界に於ては意思は即ち勢力にして、持久の意思は全然不利の地位に立ざる限りは必ず勝利を得べし。否縦令ひ全然不利の地位にありとも持久の意思あらば、遂に之を脱して思はざる成效を見るべきなり。若

シフレアリック大王の傳を讀まば必ず余が言の僞ならざるを見ん。故に余は言はんとす。幸運は最初の般の目の思はしからずとて、直

に之を放棄するが如き薄志弱行の徒に與せざるありと。余は更に道徳上秀拔せる人物となるの最良法の一二に就て少しく論究し、以て本論の結尾を告んとす。

(十二) 爰に第一に注意せざるべからざることは、則ち人生に價值と品格とを生せしむるものは只一ありて存すと云ふことを、明晰に心裏に銘せよと云ふことに外ならず。一とは何ぞや、徳義的勢力是なり。蓋此勢力は單に己れの力行に依りてのみ得らるべきものにして、讀書理論默想及び學問上の議論なども、勢力養成に大効あるものと思ふは全く誤解なり。讀書議論等は人の精神を覺醒し、又時としては物なれぬ人の爲に道標となりて其失迷を防ぐこともあるべしと云

へども決して自ら其人をして一步たりとも前進せしむるの力あることなし。行くは其人自らの足のみ。進むは全然實行に依るのみ。如何にも道標は全く之れなきに勝れるは萬々あれども、全く其指導によらずして進行することを得ば更に可ならずや。何となれば人生の行路を辿るものは必ず進むこと幾何ならずして、沼澤煙霧の地、或は荒涼たる曠野に入ることあらん。是に於て平生道標に倚賴せる旅客は進退谷まらざるを得ず。去れば人は必ず我胸中に正確なる羅針盤を備へざるべからず。さらば其人は忽ち路を失ひ、殆んど己れと困厄を同うする所の徒に向て、妄に哀を乞ふが如き醜態を演せざるを得ざるに至らん。故に青年諸子は大に豫め之が覺悟をなさるべからず。且つ人は單に自ら歩行することに依りて歩行することを知り、跳躍することによりて跳躍することを知り、劍を使ふことに

よりて剣を使ふことを知り、敢て他の力を借るものにあらず。是と  
同じく臨機自ら高尙に行動することに依りてのみ高尙なる生活を遂  
ぐるの道を知るべく、敢て他に良法あることなし。是れ人の先づ悟  
らざるべからざる最も大切なる真理と云はざるべからず。若し青年  
にして始めて社會生活に入り、先づ第一着に遭遇する所の難關に辟  
易せば、更に第二の關門に至りて元氣大に阻喪し、更に第三第四に  
至りても尙我準備の足らざるを見るに及んでは、全く墮落せざらん  
と欲するも豈得べけんや。彼游泳者を見よ、彼等の大膽強健となる  
ものは屢大濤激浪に逆て突進するに依る。若し之に反して常に淺洲  
にありて大海に出づることを知らずんば、大水汎濫に當り必ず畏縮  
してなす所を知らざるべし。故に實際の幸福なる生活を送らんには、  
彼罪障とは何ぞ、救済とは如何など云ふ一片の理屈のみにては何の

効もなきものにして、漸々自ら其卑劣の汚點を脱却し去りて、始め  
て眞の高尙なる生活を遂ぐ可し。其有様人の旅行するに當りて、進  
むに隨ひ、順次里標を通過するが如くならざるべからず。若し之を  
通過せずんばそれは停止せるものなり。故に人は日々新にして陳套を  
脱却するにあらざれば、遂に高尙なる生活を遂ぐるの機は再び來る  
ことなけん。

(十三) リヒテル謂へらく吾人最も暗憺たる運命に遭遇せる時、自ら  
吾人の最も光輝ある記憶を惹起するは、道念の萎靡を防ぐの良法な  
り。實に其言の如く此俗氣紛々たる社會の競争場裡に立ち、日常  
俗界の腐敗せる空氣中に在りても、最も高尙にして且つ熱誠強健な  
る人間動作の理想を胸中に保持するとき、自ら其潔白なる感勢を  
受けて外界の汚氣に染まざるを得べし。即ち彼迷信者流が胸間に護

符を懸くるが如く、己が胸中に神聖なる靈經を秘藏せば、百萬の貔貅に擁護せらるゝ帝王よりも強からん。思ふに此の如き靈經は東洋に於てはカリダサス、釋迦、西洋に於てはピサゴラス、プラトール、アリストートル、エピクテタス等の書に見出すことを得べしと雖も、賢良にして徒に虚偽の好奇心に驅らるゝことなき青年は、須く早く新約全書の金言を胸中に銘記せんことを勉むべし。蓋彼聖書なるものは一大著述にして、寧ろ書籍と云はんよりも小形につめたる大文學と云ふべきものあれば、諸子が彼野卑なる根情と、劣等なる慾望と、冷淡なる氣質を有する所謂世俗の輩と多く相觸接するに先て、深く我精神に銘記せば其効量るべからざる所の諸章を列記して、諸子に示すは此上なき良策なるべし。而して先づ第一に讀むべきは勿論山上垂訓にして、次は可林多前書十三章、次は約翰福音書、次は

雅格各書、提摩太利前後書、羅馬書八章、以弗所書五六章、加拉太書五六章なり。又舊約全書に於ては彼箴言書の深奥卓越なることは、諸子日常の經驗に依りて益明瞭なるべく、人生行路の指針としては此書に優る者なかるべし。我記憶に依れば彼の能く蘇國の事情に精しき故リ、校長の如きも、我國人の事業に機敏なるは、此書が昔日我國に於て個々に出版せられ、各人皆之を懐にして其金言を服膺せしに依る所僅少ならずと云ひき。又深思默想の折には勿論彼詩人にして帝王たるダビアの詩篇を誦すべし。就て其一、八、十九、二十四、三十二、三十七、四十九、五十一、五十三、七十三、九十、百三、百四、百七、百二十一、百三十一、百三十三の諸章は、青年の精神に深遠にして平靜なる信念を注入する所のものなれば、特に余の推薦せんとする所なり。而して是等の詩篇は之を幾度も通讀せば

大に信切にして寛裕なる精神の信仰を増すべしと雖も、そのみにては充分ならず、宜しく適當の樂器に合して、吾人の超越的生命の空氣とも云ふべき純潔崇高の靈氣が、自ら周圍に浮動するが如く感ぜらるゝまで之を歌ふべし。これ即ち感情の練修とも云ふべきものにして、彼のプラトンの如きは基督教徒にあらざりしも、其高尚卓越なる論策中に巧に其必要を説きたりしが、今や基督教徒たる吾等英國人は平生自ら誇負する所多きにも似ず、反て之を輕々看過するが如きは慚愧に堪へざる所なり。

(十四) 思ふに英雄を想像して我想像力を養ふは、高尚なる生活を遂ぐる爲には、神聖なる經句を暗誦するよりも更に必要なり。換言すれば若年の時より偉人善人等の傳記を熟知するは、已が偉人となり善人となるに最も確實なる方便なり。余が經驗上よりするも偉人の

實例ほど有効ある教訓はなし。即ち吾人若し彼等の傳記を讀みて實際彼等が偉大なる事業を成せるを見るときは、自から大水の響くが如き聲ありて、嚴かに『爾も亦行て其如くせよ』と吾人に告ぐるものがあるが如く感ぜらるゝなり。勿論人は皆英雄にあらず。又偉業を遂ぐべき好機は常に來るものにあらず。故に諸英雄と同一轍の事業をなすこと能はずとするも、稍之に似たる功業を立つることを得べし。乃ち諸英雄の如き高大なる舞臺に立たずとも、同様の勇氣を顯はし。同様の堅固なる道念を示すこと難からじ。只之を英雄の事業に比すれば規模の稍小なるのみ。故に如何なる人と雖も我力のあらん限りを盡し、我事情の許す限りの業を勉めんとせば、必ず眞正の偉人の實例を學びて大に利益する所あらん。夫れ人の立場の大小により、又は世俗の喝采の多少によりて、人の大小を即斷せんとする

は誤の甚だしきものなり。西歐政治的關係の中心を移動せし彼大戦争の前夜、モルトケ將軍が畫策せし所の如きは、實地の智識を基礎とし、判断力と手練と注意とを以て之を適用せるものにして、此の如き智識は其實、田舎の町村長が或は水道工事の議案を作り或は街路改良の爲に課税を目ろむ等の事ありても、同様の判断手練注意等を以て適用すべきものなり。加之ず最大の道德的偉業は屢世俗に稱揚せらるゝこと最も少きものにして、多くは社會の最下層の最も人に輕視せらるゝ境涯に於て實行せらるゝものなり。故に青年たるものは古今各國英雄の事蹟に對して其想像を馳せ、或は死せる群雄を捕へ來て之を心裡に寫象せば、自ら彼等の善行に效ふに至るべく、『許多の證人雲の如く』我を圍みて監視しつゝあるが如くに感ぜられて、卑吝の舉動をなすに忍びざるに至らん。若し夫れ信仰とは如

何なるものなるかを知らんと欲せば、宜しく區々たる教義上の議論をば、カルピン派アルミナス派等の人々に委して、己は先づ希伯書十一章を讀み、能く之を味ふべし。さすれば紛糾せる神學上の空論争議の煩はしきに陥ることを免るゝを得ん。蓋此章は彼大使徒が具象的諸實例に依りて人々を教ゆべき方法の梗概を示したるものなり。而して聖書は是等の好實例に富めりと雖も、近時の説教は之に反して是等の例を用うるに少きが如し。實に余は彼長椅に懶臥してサツカレ、其他の通俗作家の小説を繙き、其中に充滿せる人情的諷刺を讀みつゝ、獨り笑靨に入るか如き青年を見る毎に、眞面目と羨美の情に依りて我心を訓育し、以て後來敬重すべき人物となるの基を造るべき時代に於て、早く己に斯く他を冷笑し或は獨り詰らぬ興に入るが如き習慣を養ふ所の彼等の將來は、果して如何なるべきと潜に

之を危ぶまずんばあらず。正直に告白せば余は實にサツカレの小説を讀みて何の得たる所あざりき。彼小説中に現はれたる最も善良なる人物の如きも、只少しく薄弱なる欽慕の情を起さしむるのみなり。而して其些少なる欽慕の情は、他の悪人物が讀者に及ぼす所の悪感化の爲に全然消滅するまでに至らずとも、到底自ら人心を強健ならしむる程の勢力あるものにあらず。彼のプルタークの傳記の如きは希臘の諸書中一時は最も喧傳せられたるものなりしも、今は漸く勢力を失へるものなるが、此書は凡そ人間實力の原量たらざるべからざる富瞻なる實例を記せるものにして、真正の偉業に對する美妙なる感情と、人間の弱點に對する至温の同情は其書の特色にして、之に比すれば我邦の史家は議論に巧なれども、教育的價値の甚だ乏しきを覺ゆ。故に青年諸子は稗史小説を讀みて人事上の奇談嘲

諷等に親むことをやめて、専ら良好なる傳記を讀み、英雄の遺風を慕ひ、其真正なる血と肉とに相接することを學ばざるべからず。彼の海の如き度量を以て、僕をして燭を執て己を誹謗せるもの、歸途を送らしめたるペリクセス、或は足には平和の福音を穿ち、手には聖靈の劍を掲げ、悠然として諸王諸高僧の堂々たる陳營に立向ひ、堅く我信仰を取て動かざりしルーテル、繁華なる首都の名譽ある招聘を避けて、アルサスの僻邑に入り、確確なる山地を開て精神的天國と、有形的極樂とを造りし牧師オペルラン、みな是れ永久磨滅すべからざる大事實にして、深く青年の心裏に銘記せらるべきものあり。事實は事實にして何人も之を否定することを得ずと雖も、小説の如きけ之に反して其最も良好なるものと云へども、其根底に何の道義的意義あるにあらずして只是れ光彩ある水泡の如きのみ。其色や美

ありと雖も一たび微風のそよぐれば、忽ち其跡あかるべし。  
 (十五) 去れども幸に現に生存せる大人傑に面謁するの機會もあらば、  
 直接に其人の生ける感化を受くるは、傳記を通じて古英雄の反影を  
 見るよりも其功遙に大なり。書籍は如何に真好のものと雖も人間の  
 高尚なる性質を喚起する一機關に過ぎずして、其働は間接にして薄  
 弱なり故に徒に書棚にありて塵に塗れ、絶て机上に上ることなくし  
 て、人心に微少の感化をも與へざることもあらん。然るに生ける大  
 人物は一種の電氣力を有し、一たび之に觸るれば人は決して其感化  
 を逃るゝこと能はざるなり。勿論是は其人が之に感動せらるべき資  
 性あるときのみ限りたることにして、如何に大英雄ありとて之  
 を見ること能はざる盲者死者には何の感應もあかるべし。而して世  
 には各々其道に於て皆相應に信用ある人にてありながら、基督の如

き大偉人の出現を見て、心中に「彼は悪魔につかれたり」など云ふ  
 感を起すが如き徒輩もなきにしもあらず。去れど若し諸子にして、  
 彼聖書中にある學者達或はパリサイの人にあらずして、其青年に相  
 應じき敬虔の受性と高雅なる感覺を有する人ならしめば、直接に眞  
 正の大人物に接するの機を得るは諸子に取りて此上なき幸運なり。  
 而して諸子が之に接すること彌々近きに隨ひ、其益も彌々大なるべ  
 し。何とあれば之に接すること益々近くして、其美德の益顯著なる  
 は、彼の智識の英邁なる人物にあらずして、獨り道德的に高尚なる  
 君子にあるを以てなり。若し夫れカルマー、マクロード、或はナン  
 センの如き君子に接して自から其熱情に浴する機會もあらば、感性  
 に富める青年諸子の利益は、希臘人の凡ての智識よりも獨乙人の凡  
 ての學問よりも、蘇格蘭人の凡ての敏才よりも、更に莫大なるもの



あらん。是等の生氣ある感化力を見て輕薄の痴漢は冷笑すべく、深沈なるガマリエル輩は擯斥すべし。然れども諸子は其信ずる所の人を知り、而して其人は現に諸子の相觸接する人ならば、請子は之に依りて幸福なる成長を遂ぐべく、諸子の脉管は活液を以て充たさるべし。何となれば英雄を知れる諸子は即ち真正の葡萄樹に接木せられたるものなればなり。但徳の光赫々として萬物爲に生育するが如き偉人物の直接なる感化を受くる能はざる諸子と雖も、必ずしも全く四圍の道德的風潮のまにまに動かざるを得ざるにあらず。縦令ひ四圍惡感化の浸入を全然拒絶すること難しとするも、我より進みて其惡感化を吸入するが如き舉動を避くることを得べし。概して人如何なる位置にありとも、友人を撰擇する能はざるが如き事稀なるものにして、一般に道德上の染毒は傳染病の場合と同じく、其勢力の

半は當人の薄弱なるより來る。故に諸子にして責めては其純潔なること基督の半ばに及ばんには、賣婦と相撈へて相彷徨するも何の不可なることあらんや。去れども實際肉慾の弱點と、青年婚期に於ける特種の誘惑を思へば、如何なる場合にも、如何なる事情ありとも、誓て不潔なる狹斜の巷などに誘ふが如き人々と交際せざる様にすべし。不潔の境に入りて瞬間の體慾を滿し、一時の樂を極むることを得るとも、そは到底斯くして得る所の品性墮落の損害を償ふに足らず。夫れ惡徳は決して許容すべからざるもの、吾人は素より人の罪過を見て其人の爲に泣くことあるべく、否實に泣かざるべからず。決して強て自ら進みて惡風中に戯るゝが如き舉動あるべからざるは勿論なり。此事に關してロバートペリンズの實例を見よ。彼は説教の道には堪能なる人なりしと雖も、其平生の實行は實に悲むべきも

のにして、轉た吾人をして、プリニーの『人間ほど傲慢にして又人間ほど卑劣なるものなし』と云へる恐るべき諷刺を思ひ起さしむ。諸子は彼れの如く幾分か其罪過を償ふに足る所の熱血と、充實せる元氣とを有せずして、徒に彼の不幸なる詩人の惡例を學ばざるやう心掛けざるべからず。故に出來得べくんば常に已れより高き人と交際せよ。若し又不幸にして已れより劣等なる人の間に立たざるべからざる場合には、是等の徒をして已れと同等の地位まで進歩せしむることを得ずんば、彼等は却て遠からず我を已れ等の如き劣等の地位に引下さんとす。尤も彼等を引立て我等と同等の地位に進ましめんとするには大に智識と愛情とを要すべきなり。

(十六) 曾てワイマルの詩聖は云へり、『人多くの事を試むるは可あり、去れど不規律に生活するは不可なり』と。人苟も規律ある生活をな

さんとせば、必ず仕拂の時間とも稱すべきものを定めざるべからず。見よ。商賣上の取引に於ては成るべく現金にて仕拂をなし、又は現金仕拂の出來ざる折は、成るべく計算の疊まらざる様に一定の期限毎に決算をなすは、借債を拒ぐ最良法にあらずや。その吾人の神に對し又已れの靈魂に對する仕拂も亦此の如し。物は物そのものよりも之を用ゆる人にあるものにして、如何に詳細なる海圖と羅針盤ありとても、航海者若し之を正則に使用するの習慣を得ずんば、又何の用をかなさんや。此點に於ては古のピサゴラス學派(此學派は一の學派なると同時に一の教會なりき)の好習慣こそ吾人の好模範たれ。

『今日行ひし事どもを、

心に三たひ問ひかへし、

思ひかへさぬその内は、

眠りなれど、人々よ。  
 如何なる方に、そも我は  
 進みたりしか、さてはまた  
 我身に適ふ善行を  
 仕遂げたりしか、其上に  
 如何なる善事を行はで、  
 空しく其日を過せしや。  
 かく自からを顧みて、  
 我身の上の罪障を  
 懺悔の徳もて拭ひされ。  
 善業積みしと思ひなば、  
 心は獨り喜べよ。』

余以爲らく、古の高僧の所謂『人間の靈魂に於ける神の生命』なるものに於て、大に卓越する所あらんとならば、必らず自ら一定の間一室の中に獨坐して、大に自己認識自己修練の業を修せざるへからず。彼讚美歌の作者は曰く『寢蓐の上に坐し、自らの心に問ひ、自らの心に答へて自ら静寂たれ』と。

『涙なからにパンを食ひ、

山鳥の尾の長き夜を、

なきあかしたる人ならて、

神の力を誰か知る。』

此は有名なる詩句なるが、是を歌へる其詩人は決して舉動の餘りに窮屈なる人にもあらず、其口調は決して悪感を催さしむるが如き性質の人にもあざりき。使徒ポール曰『怒りて日の入る迄に至ること

となかれ』と。凡て是等の語は皆ピサゴラス派の詩句にある如く、時を定めて道徳的反省をなすことの必要を明示するものにして、歐洲諸國の安息日の如きも須らく此用に供せらるべきものなり。勿論猶太の安息日なるものは元來身體休養の爲に定められたるものなるべし。而して後純然宗教上の目的を以て定められたる基督教の所謂『主の日』をも亦衛生上の目的に用ゆるに至れるは最も良策なりしと雖も、人をして日常蝟集する職業の羈絆を脱し、充分なる自由を享けしむる所の此好機會に際し、少くとも其日の一部を道徳的反省の用に供せざる人は決して賢良の人にあらず。我蘇國人の所謂日曜日の『峻酷なる確守』なるものに對しては、是迄外人の酷評も随分少からざりしが、是等の批評家は宜しく豫め蘇國人の道念堅固舉止端正にして一般に信任するに足る所以のものは、多く此日曜日を謹

慎沈着に確守するの習慣に起因する所あるを思はざるべからず。一輩滯水を隔て、吾人の相對する快恬なるケルチック族の隣國人の如きは、日常の生活甚だ騒々しくして隨て自ら最も謹慎に取扱ふべき事柄を執行するにも、兎角輕卒にして激し易きが如し。此の如きは到底真正の徳義と一致すべからざる所なり。思ふに我蘇國の如く全然放歌するを禁ずるは吾人の信仰に一種恐怖の念を帶ばしむるが如き傾なきにあらずと雖も、又佛國人の如くに日曜日を輕視するは不可なり。若し彼等にして日曜日に於て今少し謹慎の精神を養はば、其翌日よりは更に確實にして敬重すべき態度を以て其業務に従事することを得ん。

(十七) 道徳的反省を論ずれば言自から祈禱の事に及ばざるを得ず。此解剖統計の盛なる科學時代に於ては、動もすれば智識を以て萬物

の皆服従せざるを得ざる勢力となすの傾向あり。然れども是は只重に智識を要する事物に就てのみ至當の事なれども、此世界には智識以上のもの即ち生ける勢力のあるあり。而して道德界に於て動力となるものは決して智識にあらずして、寧ろ熱望なり。彼祈禱あるものは此熱望の羽翼にして、熱望なければ精神踟躇して揚らず、空しく空理を弄して日を送り、其様恰も籠中の鳥となりて、己れを閉せる格子の數を分類計算するが如くなるべし。去れど余は勿論自己をのみ重じて壯儼偉大なる宇宙を忘れ、天地の理法を枉げても我便利を仕遂げんと哀願するが如き舉動を賛成するものにあらず。吾人の祈るや決して神の理法を變せんことを願ふものにあらずして、只如何にせば吾人の意思が神の意思と一致して行動することを得べきやとを知らんが爲のみ。蓋し神が豫め確定して到底動かすべからざる

ものどせるもの以外に於て、如何なる特種の事情が如何程まで吾人の祈願に依りて左右せられ得べきかは吾人の自ら知る能はざる所なり。去りながら吾人の高尚なる性質をして萬物の生ける至高の泉源と相調和せしめんとするに當り、其最も自然にして最も有力なる方は、其泉源と高尚なる情緒的連絡を保もち、一意専心受身の態度を取りて之に對することは是あり。此受身の態度は即ち被造物が造物主に對する最も至當なる態度と云はざるを得ず。又實際上人の道性を驗せんとせば先づ其人の祈禱を見るに若くはなし。少くとも基督教國にては毎日明白ある卑劣虚偽痴愚の行をなしながら、自ら神の祝福を祈るが如きものあらば、それは極めて無智無學の人にのみ限る。固より基督教の行はれざりし時に當りてはダイオニシヤス或はアフロロタイテ等の神に祈りて、己が大飲放逸をも神聖ならしめんと願

ひ、少しも自ら怪まざるものありたるべしと雖も、幸なる哉ガラリヤの漁師たる諸聖の教に依り、吾人は皆此の如き迷想を脱却し得たるは實に彼等に感謝せざるを得ざる所なり。而して純正なる個人の祈禱(勿論余の論する所は習慣的虚飾的なる祈禱にはあらず)高尚なる道念の要素にして、賤劣なる肉慾的利己的人物の決して呼吸すること能はざる所の精氣なり。故に青年諸子よ諸子は必ず『絶間なく祈る可し』てふ使徒の箴言を守り、常に敬虔なる態度を以て凡ての善の大本源に憑依せんことを勉めざるべからず。思ふに彼慈悲心のなき智識はよく人を充腹せしむることを得るも、絶て教化の効を遂ぐる能はざるものにして、彼淺薄なる自信力と甚だしき粗暴は、此種の智識に伴ひて生じ易きものにして、祈禱は即ち之を豫防するに最も即効ある良薬なり。古來信仰上の常習よりして吾人が食事前に必

ず幽美なる一の儀式として行ふ所の祈禱をば、獨り食事前に止まらず、須らく常に重要なる事ある毎に冷淡に形式的に之をなさずして、熱誠を要する一大事として執り行ふべきなり。奮起せよ、青年諸子、古のダビデの如く石と投石器とを準備して汝の戦場に進めよ。悪魔の爲に戦はずして上帝の爲に戦へ。手に白刃を提くる時も、將た筆硯を携ふる時も、決して之を卑劣なる自負心の爲に用ゆることなかれ。浮華なる虚勢を張らんが爲にすることなかれ。縦令悦び心に満つるが如き時<sup>も</sup>雖も、暗膽たる失望の雲に包まれたる時と等しく、常に『嗚呼父よ、余の如きものをも亦祝し給へ』と唱ふるに躊躇すること勿れ。

## 修養論 終

明治三十四年七月三日印刷

明治三十四年七月六日出版

修養論與付

定價金貳拾錢

不許複製

翻譯者 田中一貞

發行者 渡邊爲藏

印刷者 齋藤剛

印刷所 民友社

發行所 民友社

東京市京橋區日吉町四番地

東京市京橋區日吉町四番地

東京市京橋區日吉町四番地

東京市芝區金杉濱町四十六番地

# ◎民友社出版書籍目録

## 注意

- ① 民友社書籍は全國發賣捌所に毎發兌期日を課らず發送す
- ② 若し發賣捌所に於て天災地變なくして發賣かざる時は本社發送を怠るに非らずして其發賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし
- ③ 斯る場合には本社へ前金を以て注文せらる時は必ず迅速に發送すべし
- ④ 注文は書名を明瞭に配送さるべし上中下又は第一第二等ある書籍は落ちなぐ之を認別せらるべし
- ⑤ 爲替換込み宛所は東京芝日郵便支局

(注意) 書名の頭に◎を付するものは御覽に於て高直の分に屬すと知らるべし但し定價は無論各配紙の通り異

變なし

明治三十四年一月改

東京市京橋區  
日吉町四番地

民友社







内田 誠 外 久著  
 平田 誠 第一卷 カ  
 竹越 興三郎 第二卷 マ  
 山路 彌吉 第三卷 萩  
 宮崎 八百吉 第四卷 ラ  
 高木 伊作 第五卷 生  
 北村 門太郎 第六卷 門  
 藤越 芳太郎 第七卷 近  
 山路 彌吉 第八卷 新  
 人見 一太郎 第九卷 石

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價  
 四三 四三 四十 四十 四十 四十 四十 四十 四十 四二  
 十 八 八 八 八 八 八 八 八 八  
 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢

藤越 芳太郎 第十卷 瀧  
 藤越 芳太郎 第十一卷 山陽  
 藤越 芳太郎 第十二卷 及其時代  
 藤越 芳太郎 第十三卷 琴

郵定 郵定 郵定 郵定  
 税價 税價 税價 税價  
 八五 六五 八五 六五  
 十 十 十 十  
 錢 錢 錢 錢

民友社 編輯  
 藤越 芳太郎 著  
 民友社 編輯  
 岩 德 將 森 井  
 崎 川 軍  
 彌 二 之 有  
 太郎 名 半  
 郎 臣 面 禮  
 舟 山 丹

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價  
 四二 二四 二四 四二 四二 八八 六五  
 十 二 五 十 十 十 十  
 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢 錢

傳記類

（の文章及圖解）



第五卷 第六卷 第七卷 第八卷 第九卷 第十卷  
 第一卷 第二卷 第三卷 第四卷 第五卷 第六卷 第七卷 第八卷 第九卷 第十卷

資學 家夏玩小家家簡社婦

本問 庭の 家庭叢書 樂庭戲育育生生理班業  
 活應 和家遊教養備整料一 職  
 用用 樂庭戲育育生生理班業

郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定  
 稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價  
 二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十  
 錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

第一編 第二編 第三編 第四編  
 第一卷 第二卷 第三卷 第四卷

鐵道王 山縣有朋 大隈重信 伊藤博文

社會叢書 海之日 易生 樂部 事務世界  
 附本國武 附矢野文雄 附大石正巳 附伊東巳代治 附末松謙澄

郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定  
 稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價  
 二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十  
 錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢



第一卷 第二卷 第三卷 第四卷 第五卷 第六卷 第七卷 第八卷

國國國國國國國國

偵民民民民民民民

小小小小小小小小

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說

說說說說說說說說



將

棋

秘

訣

說

說

說

說

說

說

說

說

說

說

說

說

說

娛樂書類



第一卷 第二卷 第三卷 第四卷 第五卷 第六卷

武遠市職技學本

備教

育征民論術

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

術涯術論民征育

青年叢書



第一卷 第二卷 第三卷 第四卷 第五卷 第六卷

家術家術家術

庭士少

式納

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

言部庭財

文學書類

- ◎ 武藏野見
- ◎ 文學概
- ◎ 日本文學梗概
- ◎ 松著作一斑
- ◎ 近松著作一斑附錄
- ◎ 巢林小子戲真曲
- ◎ 名家紀行文選
- ◎ 今世名家文庫
- ◎ 蘇田思軒重譯

|     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  |
| 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  |
| 六十五 | 四十二 | 六十三 | 四十八 | 八十七 | 四十二 | 四十二 | 四十二 |
| 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   |

十四

- ◎ 懷古
- ◎ 反古
- ◎ 歸省
- ◎ 新語
- ◎ 併金
- ◎ 句金

|     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  | 郵定  |
| 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  | 稅價  |
| 四十二 | 四十二 | 四十二 | 四十二 | 四十二 | 四十二 | 四十二 | 四十二 |
| 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   | 錢   |

- ◎ 讀史論纂
- ◎ 第十九世紀外交史

|     |     |
|-----|-----|
| 郵定  | 郵定  |
| 稅價  | 稅價  |
| 六十五 | 六十五 |
| 錢   | 錢   |

歷史類

十五

○ 內政外交衝突史  
 ○ 江戶と東京 (四部、大久保、勝三氏肯像入)

**世界勢類書**

○ 西亞旅行記  
 ○ 露國事情  
 ○ 西亞及列國  
 ○ 朝鮮王國  
 ○ 支那及列國  
 ○ 支那及列國  
 ○ 支那及列國

郵定 郵定  
 稅價 稅價  
 二十 四二  
 錢錢 錢錢

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 八五 二十 四二 六三 十千 四三  
 十 二 十 十五 六 十  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢圓 錢錢

○ 比西律賓群島  
 ○ 比西律賓群島  
 ○ 比西律賓群島

**政法書類**

○ 國際法要論  
 ○ 國際法要論  
 ○ 國際法要論

○ 政府と政黨  
 ○ 政府と政黨  
 ○ 政府と政黨

**遺稿類**

○ 國民的大問題  
 ○ 國民的大問題  
 ○ 國民的大問題

郵定 郵定  
 稅價 稅價  
 三十四 四  
 錢錢 錢錢

郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價  
 十二圓 八  
 錢錢 錢錢

郵定 郵定  
 稅價 稅價  
 四二 十  
 錢錢 錢錢

郵定 郵定  
 稅價 稅價  
 二十四 十  
 錢錢 錢錢



◎ 故廣井平四郎著 男爵并時雄編

### 楠遺稿

### 談話類

◎ 隨筆  
◎ 況  
◎ 翁叢話

算有 頭入

郵並上

稅割

金壹圓五十  
金壹圓二十  
金壹圓十  
金壹圓五  
金壹圓

廿八

### 社會及經濟書

◎ 乾坤一布衣著  
◎ 社  
◎ 會  
◎ 百  
◎ 方  
◎ 面

◎ 乾坤一布衣著  
◎ 最  
◎ 暗  
◎ 黑  
◎ 之  
◎ 東  
◎ 京

◎ 英國ギンピンス原著 日本水上梅彦譯  
◎ 英  
◎ 國  
◎ 產  
◎ 業  
◎ 史  
◎ 上  
◎ 卷  
◎ 英  
◎ 國  
◎ 產  
◎ 業  
◎ 史  
◎ 下  
◎ 卷  
◎ 英  
◎ 國  
◎ 地  
◎ 產  
◎ 雜  
◎ 居  
◎ の  
◎ 業  
◎ 史  
◎ 上  
◎ 卷  
◎ 英  
◎ 國  
◎ 地  
◎ 產  
◎ 雜  
◎ 居  
◎ の  
◎ 業  
◎ 史  
◎ 下  
◎ 卷

郵定郵定郵定

稅價稅價稅價

二十廿四二  
五十五  
錢錢錢錢錢

郵定

稅價

二十  
三  
錢錢

郵定

稅價

四十  
五  
錢錢

◎ 金貨本位はヤわかり

郵定

稅價

二十  
錢錢

### 平民叢書

◎ 第一卷  
◎ 第二卷  
◎ 第三卷  
◎ 第四卷  
◎ 第五卷  
◎ 第六卷  
◎ 第七卷  
◎ 第八卷  
◎ 第九卷  
◎ 第十卷  
◎ 外

◎ 第一卷  
◎ 第二卷  
◎ 第三卷  
◎ 第四卷  
◎ 第五卷  
◎ 第六卷  
◎ 第七卷  
◎ 第八卷  
◎ 第九卷  
◎ 第十卷  
◎ 外

◎ 第九卷  
◎ 第十卷  
◎ 外

郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定郵定

稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價稅價

二十二二十二二十二二十二二十二二十二二十二  
二二二二二二二二二二二二二二二二二二  
錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

十九

# 國民新聞

每號八頁

二十

定價 一月 一元二角  
 三月 三元五角  
 半年 六元五角  
 一年 十二元  
 零售 每份五分  
 郵費在內 每月一元五角  
 地方郵費 每月一元五角  
 廣告料 第一行 每日五角  
 第二行 每日四角  
 第三行 每日三角  
 第四行 每日二角  
 以上均指活字而言  
 特別(第一面)三十五錢  
 特別(第二面)三十五錢

世界に於ける新聞の王とも稱す可き倫敦「タイムズ」に曰く「國民新聞は、日本に於ける最も公共心ある重なる新聞の「なり」と。今や公平の意見と精確の報道に接せんと欲する人は、其の政治家たり、實業家たり、軍人たり、教育家たり、學生たり、高等専門職業家たり、地方紳士たり、都府の市民たる人に論なく、國民新聞を愛讀せざるものなし。されば國民新聞は、其名の示す如く、國民の最も高尚にして、品格あり、實力ある部分に行はれつゝあれば、廣告の機關として、最上の一なることは吾人の確信する所也。」

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 國民新聞社  
 電話新橋七十番(長距離加入)

## 民友社書籍賣捌所

(注意) 此に列擧する賣捌店名は本社直接に取引する店又は特別に記入申込みありし分に限る。  
 故に全國に於て間接に賣捌する店は此他に多數ありし知らるべし。  
 (注意) 間接賣捌所にて店名廣告申込みあれば追々掲出すべし。  
 (注意) 賣捌所にして取引中事故あり停止又は推絶したる店名は茲に其事故を掲載することあるべし。

- |            |            |        |
|------------|------------|--------|
| 東京市神田區裏神保町 | 飯田町        | 神戶書店   |
| 東京市神田區     | 麻布六本木町     | 北原書店   |
| 京橋區繪屋町     | 日本橋區藥研堀    | 二十世紀書店 |
| 全          | 神田區神保町六    | 渡邊書店   |
| 全          | 神田一橋通十四    | 信陽堂    |
| 京橋區采女町     | 本郷春木町二ノ二十三 | 小杉書店   |
| 全          | 大塚市錦後町     | 吉岡書店   |
| 全          | 全          | 岡島新聞鋪  |
| 赤坂區青山南町    | 全          | 中村正兵衛  |
| 全          | 全          | 東枝律書房  |
| 京橋區野町      | 全          | 便利     |
| 全          | 京都市佛光寺通り   |        |
| 全          | 三條通富小路角    |        |

美濃大垣本町  
飛騨高山町  
信州長野市  
全 八ヶ岳  
全 上田町  
全 生田原町  
全 野澤町  
全 岩村田町  
全 松本町  
全 洗馬  
全 白田町  
仙臺市分町  
全 大町  
全 新傳馬町  
全 新傳馬町  
全 白河町  
全 同本町  
盛岡市  
青森縣青森市

丸上商店

渡邊商會  
平田三郎  
齋藤三郎  
西澤支店  
西澤支店  
百合支店  
岩下新聞館  
文盛館  
鶴林堂  
都筑文明堂  
佐久新聞社  
佐勘書店  
木文商店  
但木芳次郎  
漸進堂  
鈴木萬助  
奧村書店  
石井書店  
鶴鳴閣  
鎌田書店

全 龜田町  
全 尼瀨  
新潟市古町通  
長崎市酒屋町  
武州川越町  
茨城縣水海道町  
上州富岡  
上州原町  
野州佐野町  
全 黒磯  
伊賀國上野農人町  
伊勢國松阪町  
三州豐橋  
遠州掛川町  
靜岡市吳服町  
全 全  
甲府市柳町  
全 市櫻町  
山梨縣勝沼仲町  
近江長濱町  
大津市宇上京

桂華堂  
伊吉商店  
八文字屋書店  
荒井明治閣  
成見清兵衛  
大島開成堂  
東海林書店  
越後屋虎五郎  
吉岡昌太郎  
宇都宮書店  
同支店  
佐久間書店  
河内勇作  
中田書店  
小林清重堂  
弘文堂書店  
山本吉郎  
藤谷旭日堂  
久松堂書店  
鳥飼榮藏

全 寺町通  
全 河原町  
横濱市太田町四丁目  
全 吉田町一丁目  
全 野毛町  
神戶市  
全 市元町五丁目三十四  
名古屋市本町  
全 玉屋町  
全 東横町  
全 東横町  
東京府下八王子町  
山城國向日町  
丹波國福知山柳町  
大阪府豐能郡池田新町  
丹波國柏原町  
丹波國豐岡町  
越後水原町  
全 長岡表四の町  
全 高田町  
全 新發田上町

飯田信文堂  
大黒屋  
文華隣堂  
第一有隣堂  
第二有隣堂  
吉岡支店  
石丸日東館  
川瀨代助  
靜善觀堂  
積善館支店  
弘文太館  
熊澤兼太郎  
須田正進堂  
足立攻城館  
鹽川豐翠館  
中井正吉  
由利安平助  
西村六郎  
目黒十六郎  
高橋支店  
室直支店  
萬松堂支店

全 龜田町  
全 尼瀨  
新潟市古町通  
長崎市酒屋町  
武州川越町  
茨城縣水海道町  
上州富岡  
上州原町  
野州佐野町  
全 黒磯  
伊賀國上野農人町  
伊勢國松阪町  
三州豐橋  
遠州掛川町  
靜岡市吳服町  
全 全  
甲府市柳町  
全 市櫻町  
山梨縣勝沼仲町  
近江長濱町  
大津市宇上京

潤身堂  
佐藤清三郎  
北光三郎  
安中半三郎  
集安成閣  
新田商會  
木口商會  
山日商會  
小林喜三郎  
大槻新聞館  
安屋勝次郎  
清玉安一  
富田安一  
内田書店  
太田書店  
柳正誠堂  
眞誠堂  
正文堂  
同支店

出雲國松江市  
 岡山府弓之町百三番邸  
 全 市西大寺町  
 全 市丸龜町  
 全 市上元町  
 備前津山洗魚町  
 備前中井原町  
 山口縣山崎中市町  
 愛媛縣松山市  
 全 市和氣町  
 高知市  
 福岡市博多  
 全  
 全  
 筑前若松藤沢町  
 筑後久留米市  
 全 八女郡志見村大瀨  
 豐前中津町  
 豐前行橋町  
 大分縣大分町

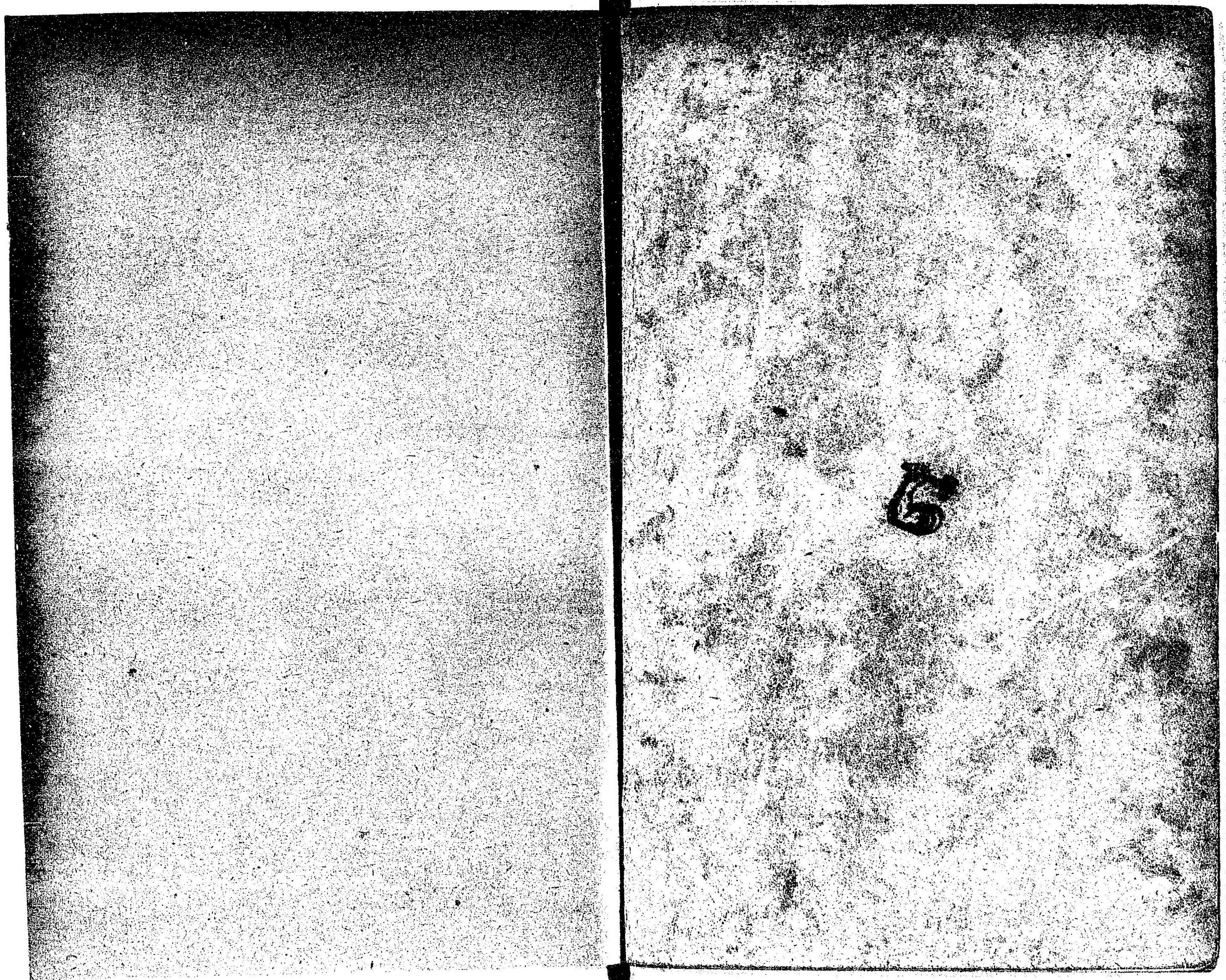
川岡清助  
 周本金正堂  
 山本弘文堂  
 吉原文堂  
 本郷文堂  
 横山萬竹堂  
 萩田書店  
 越世館  
 向井藏次郎  
 日向堂書店  
 開成書舍  
 積善館支店  
 森岡書店  
 眞海書店  
 石松國吉  
 菊竹書房  
 野田成章  
 野依成三  
 高橋種成  
 伊斐治平

全 縣竹田町  
 熊本市新町  
 全 薩新坪井町  
 全 上通五丁目  
 肥後八代町  
 全 菊池郡隈府町  
 宮崎上野町  
 鹿兒島縣鹿兒島市  
 全  
 全  
 北海道札幌南一條四三丁目  
 全 南二條四三丁目  
 全  
 全  
 全 道小樽港  
 全 道石狩國上川郡旭川一條通  
 全 道室蘭港札幌通り  
 全 道十勝國帶廣大通七の十  
 全 道釧路草花街十一番戸  
 全 道南草花街  
 朝鮮仁川港

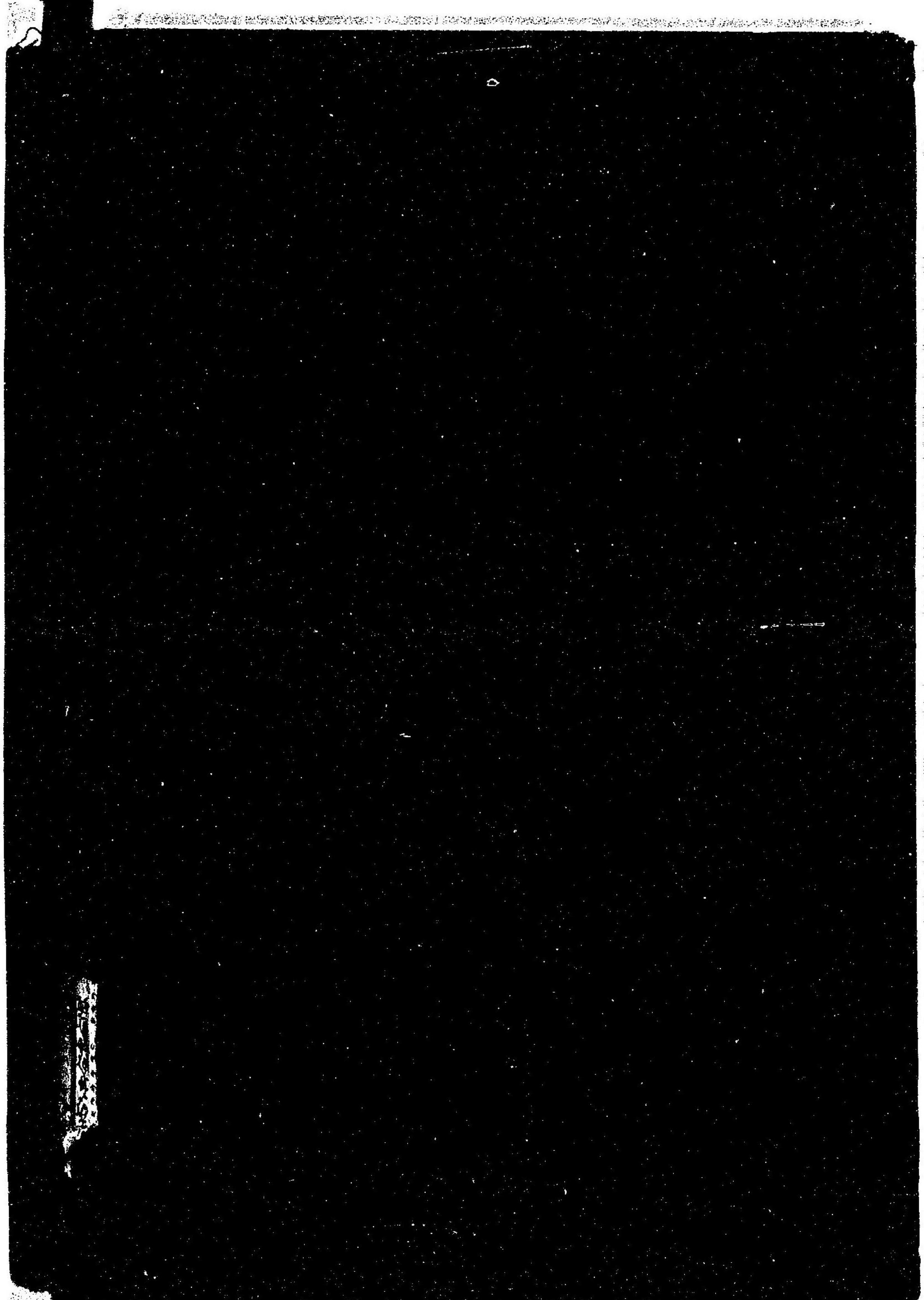
高野菊三郎  
 長崎次郎  
 好交新堂  
 中山知新堂  
 時島常平  
 中島常平  
 修進堂書店  
 吉田幸兵衛  
 金田光堂  
 谷村書店  
 進振書屋  
 廣目書屋  
 富貴堂  
 川南重祐  
 旭書院  
 最上谷治吉  
 久富書店  
 小西日進堂  
 龍泉書店  
 山岡書店

|     |
|-----|
| 88  |
| 166 |

上  
池部七郎可七、秋山  
首八穂一六



88  
166





88  
166

010170-000-3

88-166

修養論

ジョン・ブラッキー/著

M34

AAE-1473



